







Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.309



mio.

二月號

二月号目次

表 題

昭和二十八年

飛燕往来(云)	私 の 柳 友香林・摩天郎・・〈こ〉	詩川柳のデッサン東野 大八···(ゼ)	嘆きの川柳上坂 朱人…(1四)	初鰹代と江戸通貨阿達 義雄…(ごの)	三司の名と私長谷川三司…(四)	川柳大学(7)福田山雨楼…(图)	大空に描く言葉麻生 路郎…(三)	作品檢討風來子。民郎…(二)	大八· 水車
編	柳	不朽	各		一路集	同	111	近	7
輯局	界	洞	地	_		舟	柳	作	* ; 1
K	展	会から	柳	猪	渥	近		柳	
にて	望	6	壇	L	煙	詠	塔	梅	4
- 1		3		- 1		1	1028		

同	111	近	不		社	
舟	Arth	作	朽		0)	
近	491	柳		*	知	
詠	塔	梅	帳		版	
		Sec.	1			
120	DESE	麻	: (#K		The same of	
Her	生路	生路				
家	態	態	路郎			
	~				=	
-	٥	9	*		3	
	舟近	舟 近 詠	舟 近 塚 塚	舟 柳 柳 柳 梅 塔	舟 作 朽 洞 句 ★ 糠 梅	舟 作 朽 の 告 知 版 塔 欅 帳

大 もなか民かまご 阪名菓

源氏の最中

大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九 百貨店著名菓子店にあります か 電 まど本舗 話圖三四〇九

一月旬会

(市電下寺町・日本橋三電停前下車) 處一大阪市天王寺区下寺町二丁目 時—二月七日(土)午後六時

知一「腰弁」・「火事」・「樂局」 柳話 麻 生 路 郎 麻 生 路 郎 米明寺 来会歓迎·鉛筆持参

....(吴) ……(記)

に て…………………(岩)

(111)

猫」……黒川紫香選…(1点)

川柳雜誌社句會

部



:空大 言

うですか川柳である場

と川柳であつたり、そ

合が多い。それを気づ

る。その句には勿論余 句にして遺すことであ ことをグンと圧縮して いかと云えば、云いた

かないで、そうした句

桑の葉だけ喰つていれ ならない。精選された ような句でなけらねば でフシだらけにならぬ

リすると、繞舌そのも ばならないと思う。 を及びるものでなけれ がその句をして永遠性 ないし、その余韻余情 韻余情がなくてはなら 私たちの句はウッカ も考えさされる。 ている作家のあること を連続的に吐いている と同様に中途半端な思 ての悲劇がある。それ 想を中途半端に表現し ところに、川柳人とし 思う。 いる。心すべきだと 吐き出している作家も 食して、混濁した糸を 外の葉をムシャーへ雑 ばい」のに、桑の葉以

る。ではどうしたらい ないのと同じで、まこ 淋しさは、句に余韻が とに味気ないものであ 云つてしまつたあとの いたいことを、みんな ないのも苦痛だが、云 云いたいことが云え もかも喋べつて、思う 云い渋つたり、時には りするものである。何 何も云つていなかつた た句の多くは、ただご 存分に自分の思想を盛 のであつたり、時には つたつもりでもそうし ものは句に外ならな つているのである。そ く、時間と空間とを喰 かいこが柔の葉を喰つ い。しかも糸につむい して私たちの吐き出す ているように休みな 私たちの日常生活は

一 麻生路郎



(VII)

柳

式

福 田 Ш 雨 楼

講でその一端を説明されまし △川柳の形式については前 起源及び將來に亘り詳

九年(一八三八)百六十七篇 二の段階は誹風柳多留の出版 七六五)初篇が出てから天保 時代であつて、明和二年(一 間流行を続けたのである。第 そして寛政の頃まで約五十年 び江戸で流行するに至つた。 阪地方に興り次第に全國に及 明曆(一六五五)の頃から京 七音字の一句を附したもの、 音字に対しその前句をして十 句付の時代で、七、七の十四 されている。第一の段階は前 五、七、 段階を経て今日の所謂定型、 ○先ず起源からお話する 川柳の形式は大体三つの 五の十七音字が確立

> は概ね課題中心に作句してる は盛に行われており、 代である。 段階は明治以後に至つて雑詠 本立の十七音字が確立した時 が出現し、 を揆を一にしている。第三の めた七部集その他多くの俳書 は、俳諧連句の発句のみを集 七音字を独立して並べたこと 題を略し單に五、七、五の十 あるが、発表の形式として出 て面白い秀句を選んだもので は前句付の中から一句立とし いているのである。柳多留 尤も現在でも題詠 題も付句もない一 句会で

に至るまで、前後七十三年間 物でもあり得ない。 では何故に十七音字が川柳

降りてしまつたので皆んなは肩す を云うのかと、所が簡単に喋つて

んな奴か知つて居る人は何んな事

音字の独立性をおびやかす何

われているのであつて、十七

宜、句会運営の手段として行

練の方便として或は選句の便 現狀であるが、これは作句修 要するに俳諧と云うわが國民 ように、日本人が十七乃至三 がダービーを愛するのと同じ 國民が野球を好みイギリス人 からに外ならない。アメリカ 音字の詩型が最も適している 性にマッチした風流に、十七 創造だとか云われているが、 する敏感性を持つた万葉人の るどか、言葉及びリズムに対 まど言葉の最善最美の形であ あるとか、三十一字形式はや ろんな通説があり七、五調は もある)として選ばれたかと 0 わが國神代ながらのリズムで う根拠については、古來い 形式へ同時に俳句の形式で

> 更に遠く問題になつていな が、川柳味をかもし出すこと 字の句を試みた川柳人もいる 的にはこの十四音字の句が散 その風韻をつなぐに至らなか 趣には乏しいうらみがあり、 あるが、付句としての本領は なおこの外七、五調の十二音 脈を保つているに過ぎない。 見されてはいるが、僅かに命 七音字形式の中に交つて例外 つた次第である。現今でも十 川柳の形式として後世にまで 発揮しても独立句としての詩 柳多留の先驅をなしたもので 十四音字詩型があり、これは 点付句集武玉川には七、七の を確立したのである。尤も高 七音字に最短極微の文学型式

律や制度に依るのではなく自 染んだのである。そして三十 発的、民俗的にこの風流に馴 十一音律を愛好するのだ。法 音律より更に簡略された十 点が少くないが、俳句の鉄則 泉水の言説には、教えられる 碧楼、井泉水らに依つて、既 界にあっては故碧梧桐、故一 前にいつも問題になる自由律 たる季ミ十七音字を否定して 学殖豊にして文筆に秀でた井 が残党を率いて孤軍奮闘して いて述べる筈であるが、 いるが孤城落日の感が深い。 自由律が叫ばれ、 に明治の頃から新傾向さして 柳について一言したい。俳 次に十七音定型の將來につ 今日井泉水 その

三司の名と私

Ξ 司

対する好奇の目で知らない人はど きく張出された長谷川三司の名、 らない。みんなの目が宝くじの当 つたと思つたが今さら何らにもな 少し云う事を用意して置けば良か チつト勝手違う。こん事ならもう 以上も帰つてしまう。どうせ聞いて る仕度をしたり甚だしいのは半数 クローズアップされた三司個人に り番号でもさがす様にそくがれ大 るとなんと誰も帰らないこれでは へと立たれるのを覚悟で昇つて見 くれないのなら簡単にやつてしま も閉会の辞になるとバターへと帰 な事で今までもの例としてどの会 で初めて会が終了だと思う。こん れで一応会は終了しました。でわ いてはくれない。司会者でさえこ ないお添え物の様なもので誰も関 をやつてくれとおはちが廻つて来 で喋る事のきらいな私に閉会の辞 いいたします」と云う。会が終了 どうぞ誰々さんに閉会の辞をお願 会の辞がなければかつころがつか 会の構成上開会の辞があるので開 た。どうせ閉会の辞なんてものは したのなら閉会の辞はいらない。 私の常識として閉会の辞が洛ん 過日の大阪市民川棚大会で人前 だと彼一流の論法を掲げた 層俳句の本質を生かし得る

人生観や社会観を織り込

ある。わが日本民族の栄ゆる

んの愛称で呼ばれそのつ度昔の思 る。今でも古い友達からは三ちや い出の中になつかしくも生きてい だけは大阪特有の呼び方で私の想

れについて自由律なるが故に になるのである。井泉水はこ を川柳だと强弁するから問題 何等憚るところはない。これ として発表する分においては だからこれを自由律の短詩 住吟もあることであろう。 も元より存在するであろうし 内容論からすれば自由律の句 度し難いを云うの外はない。 妄に陷つては、無緣の衆生済 律からのみ生れると云つた迷 ろう。いわんや詩川柳は自由 共鳴共感を求めようとするの も徒労に近いと云うべきであ は、虫がよすぎると云うより 味本位に作るものではないが で興味は半減する。川柳は興 廣場で角力をごるようなもの 自ら興味喪失してしかも他の ろうが、それでは土俵のない 儘に作句したいと云うのであ に取外して長短区々、勝手気 すれば、その詩型の枠も自由 達に諷詠すると云う精神から 自由人の風流であり、自由濶 志操を貫いていない。川柳は れども何れも線香花火に終り は一再にして止まらない。け

路

斜陽族墓地の引越しにも困

ただ歩くだけの恋にも春が來る

夜話の中で次のようにのべて 心をうつものであるかについ ると云うべきである。 が詭弁もここまで來ると極ま て、路郎先生はかつて不朽洞 定型のリズムが如何に强

があるのである。川柳界にあ

かかるどころに救い難き誤り

つても自由律を提唱する一派

律を無視することを首背し得 ないのである。それが証左と 柳に於て全然形式や定形音 (前略) 私は詩をしての

いられる。

を全く無視する時には散文と が、それ等の形式や定形音律 音律を固持するものではない 形式主義者でもなければ定形 区別がつかなくなってしま

その については、その内容を表現 持されるかどうかと云う問題 七音字定型は今後も永く保 関係に於て考察しなけれ 柳形式の將來性、つまり

点川柳は最初から社会性をも ゆくのでは問題である。その 俳句的表現の本質から離れて うだろう」

開拓には違いないが、それが

山里は雪も馳走の数に入れ 写真機をどりよせにやる雪となり 飲みに來たように大原雲になり (三句)

蘇

町

12

洞朽不

生麻

ではないだろう。私は極端な 生活を深刻に描写しつつある らし樂にならず凝さ手を見 していると云つても敢て過言 く音律の强弱が大きな力を爲 ならないからである。大衆の 織弱さに至つては全くお話に る」を変更された時の迫力の に「かせげどもかせげどもく して、啄木の歌が後者のよう 柳に迫眞力のあるのは、全 を取入れよど云う主張もあ

型の封建性を打破する意欲の らないことは自明の理であ 起るのも自然の勢であろう。 張の表現では新味が出す、 る。また写生乃至は客観一点 や思想をそのまま盛り込うと 近時俳壇では俳句に散文精神 すれば、定型の枠が狭くて入 ばならぬ。川柳の内容に理論

> ある。今迄になかつた分野を 廣め、試みられなかつた意図 いては多大の疑問があるので が、そのことが果して俳句を に手を付けることは、 もうどする動きがあるようだ かす道であるかどうかにつ 新しい

且つその泉は枯涸しないので て諷詠された幾百万句みなこ 間幾万、幾十万の人々によつ 來はその極微形式に根本的な と限界とを摑んで然る上格 先す充分格をきわめ格の本義 れ十七音字の格に終始して尚 ているのである。過去二百年 使する努力と技法とにかか 不安はなく、これを縦横に駆 である。だから川柳定型の將 使することがこの風流の要諦 中から躍り出て格を存分に駆 て格を出でよど教えたが のである。芭蕉は格に入 り破綻を招くおそれがあ うどするところに無理があ 柳を通じて生のまま表現しよ なる現代思想や尖鋭理論を川 ない筈である。ただ複雑深刻 する領域の不足と云うことは つた批評であるだけに、諷詠

かしを喰つた様な顔で帰り仕度を

その頃「屋根裏3ちゃん」がなかっ どもから「三公」「三助」「三ピ ずい分と悩まされた。近所の悪童 ら来る三の字で小さい頃から私は う。これは私の宿題として名前か を横にすれば三だからでもなかろ 出したどけでも切りが無い。探せ くは「三笑子」「三面子」 たのが幸だつたが中でも三ちゃん ン」から野狐三次に三ちやん等、 の学は何んな関係か川柳の川の字 ば全国にもつとあろう。川柳と三 音読だけでは「山雨楼」「散二」 光」「三雪」「三休」字が違うが 付く人が二三あった様に思う。古 が三司、披講の間の呼称にも三の 事に川柳人に三の付く人が多い。 さらどうしようもないが不思儀な 司の名は親がつけてくれた名で今 つてもらっただけが良いにつけ悪 く思らが私自身三司の名と私を知 いにつけ収穫だつた。もつとも三 「山風楼」「山茶花」等一寸思い 「三福」「三夢」「三四郎」「三 「三笑」「三星子」「三思楼」 「三省子」「三平」「三林坊」 「三太郎」から「三朱」「三窓」 現にその時司会者が三吉、閉会 お土産物がなかつた事はするな

ンネリズムに陷る弊があるよ 流れと云つてよいであろう。 限り十七音字の風懷は永久の の類型化を來し、安易なマ かりましたが一面定型が作 ▽定型が川柳を守る立場は

うに思いますが ……

○たしかに定型の盲点であ

が生れ易いのである。これは などでは短時間に多作すると た安易さに誘われ、殊に句会 さえすれば川柳になるといつ のだ。五、七、五、にまどめ になり易いと云つたようなも はたの見る眼も羨ましいが 時に短所を云えるのである。 る。定型の持つ長所であり同 られたが、先生の作品を拜誦 字中心主義と云うことを唱え ある。路郎先生はその昔十七 じ乍ら格を破つて見ることで 要である。それには格を重ん 盛り個性を発揮する工夫が肝 のであるが、進んで独創味を く作句的精進の不足に帰する 本質的には定型のせいではな 云う弊害があるため浅薄な句 両親の愛に育てられる幸福 するこその実体がよくわか 方愛に溺れて意志の弱い子

君見給え菠薐草が伸びてある 太平洋に向って僕は馬鹿でした

> まで定型を忘れないところに に託しているのである。即ち もない。十七音字を胸に描き を忘れてはならないと思う。 ろにみずみずしさが湧くこと るが型を最もよく生かすどこ 工夫を怠らなかつたそうであ 伎演技の中で、絶えず新しい 菊五郎は型のやかましい歌舞 がある。先代鴈治郎や六代目 軌道を外さない手堅さて妙味 ながら句想の赴くままリズム 篏つた定型ではないが破調で 時には破調もあるが、あく 七音字中心主義は胃險も犯 妻の願いの哀れにも小さし これらはみな五、七、五に 私の処方箋には淋らればする 彼女の浴衣がのれんこなって搖れ 敵前上陸僕はふじみにて候 追求しているのである。

乳がこぼれるよ口をあきな でも台所に明るいお前だつ もう飲むなど云う娘を伸仕 の頰ベッタ 日を吸つたので日が匂う子 裸人 奈緒美 119

ままなる 一月二十八日の日めくりの ひろし

であつたが型や技だけに終ら

るがどの何もびちびちとした ずしかも格を

飛出して

真実を 新鮮さが感じられ、格を忘れ 評で爼上にのせられた句であ これらは二十年前本誌の月 やつばりあやまろう妻も子 金貨の夢見て豚の如くに眠 大丈夫何んぼ飲んでも父だ 英 朝 陀 陽 す、型を通じて柔道の精神を

その両端に一人宛上つて圧力 ことがあるが型とは云い條実 村の青年が力心流を云う柔道 双ぶりに舌を卷いたのであつ と共に今更ながらその怪力無 男ではあつたが隆々たる筋骨 に堪え万場をうならせた。 呼吸また一呼吸よくその重圧 を加えるのである。師範は一 咽喉のどころえ天秤棒をのせ た。先ず師範が仰向けに寢て つた荒業にこんなことがあつ たことには師範が力試しに行 げや技であった。そして驚い に氣魄のこもつたはげしい投 型を稽古しているのを見た 自分は少年時代郷里岡山で 力心流は型から入る柔道

頰をすぼめて街の子が歩む

雨

吹込み力の涵養を主限とした らないが、いきなり破目を外 ど思う。マンネリズムに陷る ることを忘れてはならなない 式の中に固有の本質を学びと 形式を生んだ精神を尊び、形 眞の力量がつくのであった。 が型を重んじ型にはげむ中に のである。勿論乱取りもある して自由律に走るが如きは軽 ことも嚴に警戒しなければな つては生命がこもらないが、 形式に流れ型に固着してしま

易々たりと云うべきである。 如くこれを意識せずしてあけ 式は物の数でもない。呼吸の の十七音字オンリーの傳統形 がある。それに比べると川柳 排律 古詩、樂府等の諸形式 が、なおその上絶句、律詩、 ば完全な作詩は困難である めた便覽を座右に備えなけれ 約束があつて熟語、詩語を集 くれの哀歎をのべること実に 漢詩には平仄及び押韻の二

問合されたい。 ハガキに御希望の号数記入の上 バックナンバー御入用の方は

> ひ出の花が咲く。 昔はそうでもなかつた。 り津々浦々まで名前がられ広告や 有名になり、一躍世間の英雄とな 漫画の南部章太郎が屋根裏3ちゃ やんでもなかろうと思つて居ると やらの思い、少々憂らつだつたが 看板にまで頭と目玉の大きいるち やんが飛出し肩身の広いやら狭い んを新聞に発表し俄然3ちやんが 頭がはげ白髪も増えた今日三ち

親しさと親父の意気な手さばきに けば三宮に「三治」と云う握りの と夜明し飲みあかし、神戸に行 ちやんの看板のある店は何んとし よく寄ったものだったが今ではる 屋台ずしやがあつて名前から来る のは年の勢ばかりではない。 ても気がおけて入る気にならない 云ら夜明しの店があつてよく友達 新町の廓近くに「三ちゃん」と

卒である。

その思い出の中に生きる三ちゃん のまだ所々アセチリン瓦斯の包ち アンスをたのしみ、昔の船場がた のアラベスクンその言葉のニュー 尼崎の屋根の下でラジオの「大阪 と生れ育ち焼け出されて今では ことばアラベスク」に、今はだし 一七の夜店など遠い日の想い出。 二司の名。 かしく平野町の一六の日京町堀 大阪の屋根の下御霊神社の氏子

郷愁である。 それは寂しくもまた懐かし私の 引きまくつたのが「

になるが、それは絵画の素地

近ごろ柳界に氾濫する詩川

たようなのが

繪画からする一つの考察

東 八

展の作品にぐんを比重の た。その感銘の受取り方は どいふものを考えさせられ んどはなしに "絵画と川柳 いうことだつた。これは行動 "短詩もデッサンが要る" ど どころで両展をみて私は、何 に氣をよくしたものである。 る画展の地方進出の好評を相 がえたのは何よりで、権威あ けに、充分両展の傾向がうか は少いが、嚴選されたもの わが社の主催で旧臘岐阜 かれた。 水会展で行 我太関 本展より作品数 係者は大い 動 で開催さ 美術展 から 首の でなく、他にそれを深く理解 は、 べて行動展の代表作でうち一 がなんだか判らない、知つて ている。 し得る人達のいることを示し 下つていた。つまりこのこと 枚なぞは最高賞の金札がぶら んな風の作品なんだがこれす いるのは作者と神様だけ、 A」どいつた具合である。 貸店の包紙並なのが「作品 白いカンバス上に引いた百 黑の線を眞直ぐにまた歪めて 私のいう神様と作者だけ 作品の魂に触れ得るもの 平べつたい草で黄、 青、 2 何

間に茶色の線をめちやくちや つたものであつたのだが…。 の絵具をぶつかけて垂らし まず行動展のその作品であ いカンバスに濁つた茶 求訴力とは何か、ということ リアルな作品より高く深いボ を……。結局その迫力なり、 リユームの潜むということ 妖奇? こんなことを発見した、 やがて会場を一 なこれらの作品が、 巡して私 難解 は

ある。 きている。 どもなる正 に思いおよんださいう次第で ンが要る。私はかくしてそこ にあるこどが知られた。 デッサンは明確に生 氣に引かれた線の一 正確無比 ″短詩にもデッサ 0) デッ 巧ま サン

そこにある。 奔流のような思材のたぎりが じまる。 だ。 5, 喜、眞実、詠嘆、偷躍五丁C。 ど……詩人の饗宴はかくては どいう充実。こゝは詩の天地 物』のなんどいう眩惑。なん 幾十條とも知れぬ触角が、 かの魂を逐い求めて立まど 模索だ、と私は思う。透明な 胎動する新川 その空間にある。有る 絵画で音樂で言葉で彫刻 永遠なものへの歓 柳の尖端は、 何 象の捕え難い姿の『何か』に もその言葉、それしかない字

非はこうに生じてくる。 である。言葉のデッサンの是 で押し出されてこなければ嘘 ちがいない。しかしその言葉 は容易なことではない。詩魂 ものとして捉え得るかっこれ れた表現技巧がぎりぎりの形 であつてはならない、洗練さ 旺んなればその言葉は豊穣に の奔流の中で、いかに一つの 十七字の川柳が、この思材 川柳の場合、決してナマ そうは問屋が卸すまい。詩境 あるが、特別の人々を除いて 間のその英智こそ祝福あれで のものズバリとにぎりきる人 姿は必ず持つものである。

ラダの様に……。そこでわれ うに……。新鮮なこと、 ぎり方にデッサンがある。 技巧のための『言葉』を用意 に適切な『何か』を表現する を訴えようとする場合、そこ われは詩境のなかの『何か』 6: に缺けるのは如何ともなし難 そのまゝでは句格の幅量深度 乗って上って來た魚介類のよ 蔬菜類のように、 しなければならない。このに ものにはちがいない。 からそのまゝ引拔かれて來た りにも多いのではないか、 の脊骨を持たない句が、あま くなこと、成程これは貴重な のなかには、このデッサ マヨネー ズのない野菜サ 海から網に しかし 素ぼ 物 土 まれていると思う。 方にはさまざまな問題がふく てくる。

つていくことである。 見えざる『感度』をつ い詩川柳のいのちどは、この ツサンは一 変化を持つが、 表現も色彩もそれに相應し る視覚の角度を感度があり、 の構図には、人おのおのに異 つである。捕え難 明確適格なデ かみ切

要する。川柳の一つの成熟過 持つことはわれわれの熱考を り强い求訴力とボリュームを 程において、この観賞の在り ユール的(行動展)なものによ アル(一水会)なものよりシ 比が、さきにのべた絵画のリ 伸張をいかに阻みつゝある のすど別個の柳論が考えられ 統川柳の姿を眺めるどき、 のであるが、ひるがえつて傳 か、この点を私は指摘したい い歯の浮く詩川柳が、 どを申上げたが、要は底のな 極めて抽象的で七難しいこ つまりこの両者の対 柳界 お

きことではなかろうか。 大いにこれについて味到すべ もに傳統・本格両川柳作家も 果して何か、詩川柳作家こと 前進する新時代の川柳とは 昭二八・一・七)

2

寒 JII 酒 雑 中 御 篠 西 山 見 支 舞 かっ 部

代 3 四



空腹を見すかされたかめしの盛り 寒むがりの亭主へつき矜見せてやり 福引きの種を賣場でほめてくれ 兵庫県 大阪市 中 倉 島 生 普 × 庬 天

遺言に冬の障子を閉めきりぬ ナイロンの風呂敷を被る紅葉狩 パンにモルクちよつびり食つて御出勤 尼崎市 鮎 美

see

御風呂屋へまで議員さんのバッヂ 葬儀屋さんもそつどしづかに釘を打て 煙突のくろけむり――風呂好きの亡母 一冊二十円のごこにあつた戦争史 方

銀座も停電蠟燭の火に蕎麦がくる 枯草の中でカマキリ自然の死 鏡台のものも冷えんへ秋が立つ 鋸と錐に連休使はれる 大阪市 場 沒 食 子

あの松の鼻すりぬける銀座裏

十二月別院一人もまいつてか

「要するに君達」といへる年どなり 矢張り君男は家の柱だよ 哇 市 岡 暁

舟

年の潮に逆立ちをしてみせるなり 才人の口約束を当にせず 女にされてがらつど世が変り ホノルル市 布施市 白 砂 若夫婦隣近所も無い如く

ぶちあけるように修学旅行下り 十二月ご言うに求人欄を見て 何さかが付さもならず十二月 浪人になったと言へば返事來す 大阪市 崎

豆

秋

東海道走つてる間にお元旦 飲みに來いど名刺の裏へ地図をかき 元旦は停電せぬど恩に着せ 三月の約手を抱いて年を越し

女よゝを泣いている間の手持無沙汰 元中將の後姿の事務机 苦にならぬほどの借金残しとき けんらんたる嘘ストーブは燃えさかり 水道がポトポトポトミ大晦日 子の予算妻の予算へ年暮れる 金持の塀で粉な雪降り溜り 娘夫婦の時代となりしビール拔く 囲炉裏みつめて真実の人なりし 名声に追われる妻をあわれども 母の代からの好みのさくら炭 負けぬ気の子供を頼もしく叱り 戸締をみる役だけの養子です

堤防は母を見送る風となり 鮎美さんに

> 風 車 学校を出ればと親の甘い夢 魚屋を八百屋初発の音をなり さて布團折り折り職を賴んどき ぼさして多の質は淋しいね 池田市 黑

> > JII

紫

香

二次会を抜けパチンコへ立つ寒さ 殺しの場棧敷も箸を動かさず 指切りもして老らくの恋たのし 二号まで動作のにぶい歳になり 向き会うて氣分の出ない顔と飲み 女子寮の朝はピースの箱も掃き マ、ちやんと呼ばせ二尺の袂であ 一三本來てから注文やつどきめ 大阪市 北 尾 M 潮 春

花

筆まめな人が次々死んで行き 学校の道に何でも十円屋 末つ子を分り女給は惚れ直し 奈良県 崎 方

IE

巢

客

どん臭い女ゴム靴履いたやう 訓辞々々酒が待つてるもうよろし プラトニック相手あつさり結婚し 大阪市

王

北風へ客が素通りして行つた 食ふてしまへば帰ってほしい客となり プライドを少々下げてもうけて居 鳥取市

新春のプラン老いたる父を驚かせ アイク飛ぶ世界の風を吸うように 尼 綠

之

助

十二月又パチンコへ逃避する



小説も飛ばして読んで十二月

大阪市 水 谷 竹 莊

一号とは言はれたくなし藝に生き 金の要る事ばつかりを空想し 今日も亦師匠は供に男弟子

鳥取市 山

奥行きの浅い養子に子が生れ 年の瀬をあわてる者に俺も居る 明日えの希望真白き敷布まつ 老いぬれば別な淋しさ妻の留守

ラブレター焼いて仕舞うも恐妻家 利子だけがやつを拂へた十二月 下関市 八代市 弘 野 华 1 休

雨上り墨絵の様な神路山 傘借りて見物に出る奈良の街

法隆寺瓦の欠けも金になり 案内人柱くどりもやつて見せ ゼスチャも優しく京のバスガール

ストのデモじつと見ている失業者 大臣の選挙違反は不起訴にし 大阪市 吉 田

斜

水

淡い希望又買つちやつた宝籤

わが妻が側に居たのにフト氣付 パチンコへ兒童委員もはいつて見 尼崎市

札幌市

Ш

白

星

旅帰り親しきものに夜具の襟 肺を病む女の好きなキーツの詩 靴下もある独身の枕許 夫婦相和す歯磨のチューブ

鉛筆で数える生徒の頭数

死んでない証拠に河馬の耳動き 神棚の掃除忘れた金が出る 心ブラをして失礼な瞳に出逢い

長生きをせよど相手にして吳れず 物賣りに涙もろさを附け込まれ

借金の心配もして長女なり

お一人でお寝みなさいと女拗ね

岡山県

直

原

七

面

Щ

夕陽背に先生寒うたつている 奈良県 白

倦怠期もランバカスは悪びれず

["]

鬼瓦風に怯るまぬ面構え 大阪市

占

十二月おぢいさんまで風邪をひき 不景氣は子供の賃にまでひゞき

体裁のえゝほど肥えてみたくなり ぶらしのボタンちぎつて出る師走

十二月貧乏もよいと云うこれず 大阪市 生

里

元日は日記をつける氣にもなり 食べて寝て猫の現実主義もよし

当りくじ蕩兒をしての血が流れ ふどころは寂しネオンは招けども 布施市 森

F

愛

論

文

月

歌留多どり猫は読手の膝にねる DDTをふられて猿が退屈し 鶏の空に飛びたい日もありて その蛇も実は人間恐怖症 蟹の足軍手をはめた様に挙げ

大阪市 富 淡 舟

動物関熊の穴だけ見て帰り

檻の豹皮の値踏みもして観られ

猛獣に餌をやる職にやつと就き

光サット心の傷を突きさせり

降 香

警察に來ても商人もみ手をし

女店舗を拡げて貞操疑はれ

機関車の様な女房に引きづられ 後妻より妾の方へ子はなつき 好きな娘の拗ねた姿をカメラにし

J: 田 春 柳

野に叫び山に喚いて入れられず

縁あつて今日教へ子を妻と呼び 捨てられても一号仔猫をよう捨てず

世に出でゝ墓参を年中行事にし 保健婦の保健婦らしい顔の艶

病妻へある日はアチャコほどおどけ 鳥取市 村 日

滿

7

子への叱言を病人が受けて立ち 外聞もなく宅の子へ拍手する

看護婦に愛され食養生出來す 空間だけ貸したに娘までさられ 兵庫県

一着の顔へキッスのあどがあり

引き合いに出されハンサム顎をなで 兵庫県 家 沢

花

山

弓

削

平

タクシーのお飾り春の風をきり 仕合せは先祖を同じ初日の出 泣き初めはもうすみました子も坐り だしぬけに隠居昔の事を云い

熊本県 西 H 如

111



大阪市

西

4.

b

を

道徳を説けば盆々野暮にされ プラスする積りの自慢して見度く 岡山県 島 鉄 兒

三ヶ日済めば断る日々なりき 昇格の椅子は汚職で空いた後 休みかご聞けば今日からストだんね 浜 路

紅燈の街エプロンの純潔さ 奥さんの職場へ行つて叱られる 大雪に迎えにやつて來た小犬 大阪市 塩

時間表通り駅の寒さへ投げ出され 屋上へ出てボーナスの封を切り 遠縁を頼つて降りた駅寒し チャルメラの此処にも生きる夜の音 大阪市 稲 翩 骨

お氣持は判れどさうはなれぬ性に続情な妻にエロなどさげすまれ 取込みの中も女は飯のこと

汽車賃は足るかどホテル出るときゝ

枝

郎

駅長の趣味がホームに鉢を置き 熟慮してまたもチャンスを取り逃がし 植樹祭で植えたを伐つた松飾り 服 部 + 九 平

さつばりと馘られ帰郷を見送られ 八分まで飜訳ですが新刊書 足 立 春 雄

芦屋市

若

林

草

右

岡山県

田

干

石

ライバルが憎いトランプ占う灯 だまされる事も知つてる好い社長 月給も貰うたんびに腹が立ち 働 芳

> 樂屋裏叱られている汗もあり 再軍備反対しない株を持ち

じりんへど迫る女へ酔い足らず 義理固さ貯金下ろしてまで蔵暮 香川県 大

腹立ちのそば杖喰つた交換手 年越して忘年会費まだ残り おやこゝも忘年会か四〇、〇〇〇台 田 良

岡山市

永

忠

木枯へ案山子のやうに巡査立ち 通人はそばも遠くへ食べに行き 下関市 Ш 侃 流

坊

洞

濡れ手の栗もう一度聞く十二月 恐妻であつさりなれた断りよう 孫のあるこどから意見一致をし 大阪市 安 岡 珊

氣短が損と知つたは四十過ぎ 学歴はどうあろうどもハンマー 遠い縁なれど松茸のころ顔を出 子のストで親の商賣揚つたり H 遊

死ぬ日まで老母に多忙つきまとい 勘当の息子刺青して戻り 貯金だけせよで郵便局貸さか 文化では悲し段々置き去られ 大阪市 山 本

姑は電氣炬燵が嫌いなり 倉敷市 村 千

容

光

仙

西 迷

窓

美 歩く方がいゝとは惚れている証 嚴粛な顔で姙娠囁かれ 病み上り保險組合礼讃し ブラックの安全感に見据えられ 或日ふど母の体臭なつかしむ 岡山県 H

大

保安隊つぶした兵舎叉欲しく 物騒だ巡査に二階貸したろか 婦人会言葉の綾で嘘も云ひ 二号の嘘承知で小切手書いてやり 贈答のピースと女給見破れり 石川県 那 谷 垣 光 方

郎

十二月だから暮しが句にもなり 筆太に書いて回讃の重苦し 喰へぬこど口癖にして小商い 大阪市 石川県 木 野 村 村 水 味 堂

溜息の出る相談を持ち込まれ 十二月本家としての金が要り 花 岡 英 子

今の今会いたくペンをすべらせる 私でものめますのよど松の内 ビャホール孤独なおれど誰か知る 意地を張る淋しさ知つていますのよ 木 摩 天 郎

そう言へば指にダイヤは無かつたよ 地震だけ南無阿彌陀佛の妻なるや 情熱の歌人晶子を思ふ海

團交に入らず机に坐り込み 福 田 T

夢を見る様な色魔の口車

路

勝手口女中が恋を見付けられ

ボーナスの額を吊革聞いてゆれ

大阪府 青 柳 扇 子 仙

唇を氣軽に許しこわくなり 眞心で贈るキツスの良いボーズ これ以上産まぬ工夫が無駄になり

破産する一歩手前の神詣り

美貌には遠く医専でならしどり 商品化す女の强氣惨めなり 決心がついたか女飲むと言う 分娩費貰ひわきめもふらず去に 手話しに硬い女医さんまで笑ひ 妻として子として見れば詐欺ぐらい 谷 谷

笑つたしくどは父の愛 原 おい影よ道化師だとさ資本家の

冬空の雲へ鉄骨の只高く 借のある友にパチンコ屋で出逢い 只部屋を飾るミシンを買う生活

借金をしても飲んでる一級酒 屠蘇機嫌もうやつてをる初喧嘩

拔作に見へる男で恙なし 欺す手も知つて居ますと未亡人

中

谷

仙

坊

杜

的

身の上を聞いて交番火をするめ 末席は五人の割で火鉢が來 口笛でアプレ質屋のドアを押し 岡山県 井

天才見もう此の頃は酒も飲み 氣に入らぬ談しお轉婆らしく見せ

> 内幕はワンマン主義の農家なり 女客女にかたいひどを褒め

岡山県 岡

4

耕

鞍

馬

水

うたゝねが娘の方へ方へずれ 來ぬ人へステップだんし、売うなり 釣り合わぬ養子男くたびれる

役僧の衣へ涼し過ぎる風 青い顔してゝもお金貯める氣か

偽政者のうそヘラジオも步を合し 田 惠

農繁期鏡を忘れた日が続き マ、だけはこゝで持つわと山の道

息災な夕餉がつく一始めたり 利子のつく金でたんすをかさばらせ 愛妻らの虚栄へ地位は追ひつけず

波

両陛下背廣和服の歌となり 落書も今は亡き見の一周忌 金持ちの犬迄俺を馬鹿にする 京都市 松 H

幸福な一刻犬さたわむれる 草深く茲に人住む燈をどもし

大阪市

永

田

六

電

子

薬

銀行は貸してやらぬと言い切らず 特價品選つてる肩を叩かれる 十二月わが家の風呂にひたる幸 鳥取市 本 法 泉

子

質ぐさは首だけさげてきたモシン

不味そうにお膳眺めた懐手 村

茨木市 潮

朗

鵬

手切金次の火遊びもうはじめ 御時勢へ折れた老舗の螢光灯 氣安さは間借シメ松など要らず 停年が迫る身煖炉へいたわられ



同 舟 近

詠

真相が次々を出る世なりけり がやしのうちに吉田の役は済み 松山市 前 田 ffi.

健

湯上りは再び朝の心地なり いつ誰が拂うか改札口のカネ 三万噸あたかも山の如くうごく 東京都 大阪市 富 ± 生 野 葭

73

再建の家の佛壇たのもしく 牡丹雪やぐら太皷が鳴りさうな 山は雪踏み分けて追ふ人もなく カレンダーの釘うつ暇もなく暮れる 起重機のバックの海も暮れかゝる この辺に野だての釜のほしい芝

長野県 兒

大吉

風

子車

郎

Ш 名

上の子は足だけ母に觸れて じますね

たこどか後味に「足」が下五 愛から遠い。(末つ子にくら その様に「上の子」の位置は さんのこの句をみて直感的 くも私に迫る一だが、どうし な立場の悲哀が、ほゝえまし ベて一)そうした子の肉身的 で現はしたものですが一)の みたこどがあります。弓削平 使われる子沢山〃というのを 大八=むかし〃上の子がまた に、この句を思い出しました (この場合はもつを強く母 令で、 ど、上の子が七、八才位の年 風來子=子沢山であること 的な紋方の点である。 すれば「足だけ」と言う断定 のではないか、問題になると 何となくいちらしい所がある 上の子」の年齢を推察すると 乳吞見が母の懐近く寢

をみる時、勿論此句の場合「 には甘えてみたい氣持が又い る。斯うした意味合から此句 くつになってもあるものであ ても子供どして観る。子も親 水車=親は子がいくつになっ ぎであろうか。 うに想像するのはちど考え過 ている嫌はあつても、このよ いうわけです。多少誇張され て、足だけ母にふれて寝るど 近寄ることも出來す体を曲げ くなつた羞恥心もあり、

う、しかし上の子だけは大き に寢るために場所をうばい合 ている、その間の子が母の側 愛、つながれるものの情感が しい。ほゝえましい母と子の だけさわつて甘えたいのであ この様に寄り添つて貰えたの が同想句があつた。にも拘わ る。それを母も知つているら に、いまはせめてを母の足に るからであろう。自分も嘗て うした句想が川柳のみちであ らずうなづける句である。こ 民郎=ちょつと思い出せない

> 情感に訴えるものがある。 國民性から何時でもじいんと 足だけでも」の意味 たどえ古くども、我が特有な はない。併し斯うした句想は で子沢山の感じはしない。兄 で原句に逆戻り、「上の子は」 したが、どれもこれも不完全 艘る」等々、作り直してみま 白星=「足だけ」は「せめて (或は姉妹)二人。新しさ 「せめても足を触れて だらう

母に います。つまりこの子は足だ「断定的な敍方」にあると思 こかに妙にひつかゝるのは、 かね。私たちの場合は、 の種の生態をみている故です 体験や、現在の三人の子のこ 受けるということです。私の る、そんな風な(私だけかも けでいつも母に触れて寝てい てねる」といったのが、私のど る。しかし「足だけ母に触れ ゝえましくも私に迫ってく ら遠い位置にある悲哀?がほ になる。さきにも申しました ば、観賞者の共感が薄いもの は何かなしの合理性がなけれ 篇はない、しかしその表現に 大八=情感というものには理 しれませんが-) イメージを 水車さんもいわれるような ように、上の子の母の身体か

こんな、どんらんな見極め方が、立派な句にするのは案外 どーいわれるかもしれません 立止まらず「もつど別な何 私には「足」だけどいう点に ましい?までの努力。隨つて をむいてヨ」「お話きかし にも一つの責任があるのでは 欲しいのです。そんなことを か」の情感の押しひろめ方が の子がいつている。一種涙ぐ てなどとさまざまなことを上 「お手て頂戴よ、」「こつち ふれていることも勿論ですが

白星=大八氏の家庭の場合を どこの何は生きてきません。 羞恥心を持ち如める頃でない をする子は五、六才位であつ 上の子は多少物心がついて、 しても七、八才位でしよう。 だけふれて寢る上の子はどう て、この句のいわんとする足 大八さんのいわれるよう動作 風表子=やはり「足だけ」と 難しいことをいつて一。 ないか、これさえあれば、 場が出來上ることが必要では 素地にはうんを優れた一つの いう処がこの句の生命です。 大分苦労のあどが見える。 水車=作者はたしかに上五に いかがなものでしようか。 く出した句にも貫祿がある。 ないかども思います。句作の

ひつかいります。もつと何 の調子からか、何の味に妙に

かーミいつた情感の分野を感

が、この句は中七ミ下五で成 立していて、上五はリズムを える方もあるかも知れない 象化してもらいたいように考 風來子=水車さんのいわれる 論に從えば、さはあれども具 具象化がよい句になるさいう

> ーマニズムの何物にもふれど れば雲霧莫々、この句はヒュ んが「ヒューマニズムは論ず のですが、論説委員の希ちや

うな句をどこかで見たような 大八=〃どは申せヒユーマニ に沢山一つのお布圏には寝ら ありませんでしたが、そんな は乳吞み子で、上の子が五、 **髣髴させる。ボクの場合想像** れませんしーーせいんく大 「子沢山」論に対して反駁も 六才位でもいうでしよう。 八氏の家族程度でせう。もう ムは哀しかりゃといったよ 歩を言う意味での秀逸か。 さはあれどヒューマニズム だけに筋は一應通つていると あろう。作者が初心者でない する野心はあつて然るべきで る。今後作句する場合、こう 賞者に求めていたようであ 法が続々使われ、それを默認 けらしい、しかもこうした句 る。所謂具象化していないわ この何はつまらなくなる。 く、これ以上具象化しては、 整えるだけで別に意味はな した言葉を揚棄して見ようと し、しかも作者は具象化を鑑 ど」は体のよい逃げ言葉であ 民郎=臆測すれば「さはあれ

大八一この句を社のうるさ型 空疎。定型的なマンネリズム。 は巧妙な或は狡猾な逃げ言 部分が大八氏の提出された句 論議百出、錄音すると面白い の記者連中に示しましたら、 ろう。含みがありそうで、内容 ど」以上に巧い表現もないだ 薬。さはあれど「さわあれ 言つたまでで、「さはあれど」 よりやゝ具象化されていると 白星=水車氏は「利に遠き」の

遠きッさて?

の角度はありますが… 〃利に いているだけ、それそれだけ んの対象には利害の打算が動 とはありませんが、緑之助さ ます、いづれがどうどいうこ

> ころだから。.... 隠見する一片鱗こそつかみど

生活が守れないというウガチ だけでは損ばかりして自分の が、しかし、ヒューマニズム 明しているのでも、解剖して き」に具象化が認められる。 理由で此句は下、五の「利に遠 な場合五七五の一乃至二の何 ユーマニズムと真正面から取 が言外にあるど私は見る。ヒ はヒューマニズムは好きだ いるのでもない。要するに私 ない。又ヒューマニズムを説 されないがこの句の問題では 風来子=結局具象化される、 いふえんする事になる。この とすれば上五下五はそれを補 よいと思う。仮に中七にあり れかに具象的な表現があれば ある事は勿論であるが一般的 句そのものが具象的具体的で 單に申すど私の考へどしては を見る思い。

氣がします。それどこの句を

くらべると確に共通点があり

私は見る。

だろう。 組むと、新聞の論説委員のお ぢちやんのような意見も出る 白星=「ヒューマニズムは好

氏御提示の句よりまさるもの

一歩近くなつて居る点は大八

疑的である。しかし具象化に にされた所が批判的であり懐 水車=「利に遠き」とむき出し

きだ損ばかりする」をそのま どは言えますまい。 ゝ詠んだのでは上々のウガチ テント村ポスターにない雨 でスキのない川柳を作ると

みんな美くしく樂しく、 大八=旅客誘致のポスターは

うことは、眞打の信頼感みた

大八=熟練者が熟練した技法

ありましたな。

霧莫々だからこそその空間に

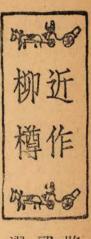
かし私はそうは思わない。雲 らん」という酷評でした。し

> の入つた作者とその句の一句 て明るい。海は招く、 が程よくきいてますね。年期 と現実のコントラスト、諷刺 だゝ降りの雨、 て出かける、どころが、あには よい異性の友だちを誘い合せ けましよう、てな具合で仲の く、そこでつぎの休日にでか からんやその目的地につくど ポスターの夢 山は招

とマッチしてこの句をさらに だどかいわずにテント村が雨 申分がない、名所だとか古蹟 大八、水車両氏のお説の通り さすが面目躍如どしていて、 風来子=春巢さんの句をして 対する痛烈な一矢ではある。 何かど思うが、においのする ひきたてている。 句、儲けんかなのポスターに 水車=漫画風など言つては如

が降り」(水府)だつたかが ば、「測候所理篇に合わぬ雨 は適評。諷刺の点から言え ト村」がいい。「漫画風な」 白星=感じのいゝ句。「テン わやかなものが感じられる。 である。ウイツトが利いてさ 民郎=ちょつどいただける 別念 旅館 つな 家 大阪市南区長畑橋第二/二一 (道頓堀日本橋北詰西側) 電話 © 7238

か…。 にない事ばかりど、 柳にも二次元の世界が展けて の感じがしないでもありませ 乃ち「うまく作つてやがら ら深いものが汲みされる。 水車=今の世の中はポスタ み感じます。余計なことです 私にはまた寂しいんです。 白星=「ツボにはまつた」 ないのが現実である。此句 スターの裏ばかり見てくら いゝ、展けるべきだとしみじ 々たる風格が。つむじ曲りの たッツボに入つた川柳ッの いうさころ。しかしこうし いなもので眺める方も安心と 言つて Ш



人してからへるほどの木もくきり

大阪市

竹內花代子

接吻をして 二号置く腹 奥 手 3 3 3 7 h 男 供 知 は 3 5 を ま 5 いが 0 Ŧi. U 0 大阪市 同 石川ひさみ

男ポカンピア 骨拾ろてくれる会社の 失恋かフフ を 0 拾 語 3 元 ۴ 釣場 12 卵 から 大人氣 は な 秕 1= p: 向いて立ち を 0 を くに 弱 Ut 3 < 貝塚市 宮本 同 同 甲馬 罪

円

垢石

派出婦の世

界

しもあ

側 b

近 出

派

人絹の暴落普

段

着

ば

カン 3

來

荒

新婚は火鉢へ握つ 七十九の附添ヨタ

5

あ

h

倉敷市

野田素身郎

同

席なんか譲るもの 金 階 から 順 有 1 かと読みふけり 0 小 1= 3 圆 病 肥 今治市 同 文庫

火鉢まで職

<

快

は

お

蔵暮まだ貰ふ身でなしするばかり

忘年会下 税吏われ同

月 窓会

は

女

0)

組

E

入

h

同

~ たま

小

3

<

座 7=

同

立志傳眞似の出來たは 昔なら俺だつてや て來 ブで焼く秋刀魚 3 家 太 多 H 0 閣 数 2 記 决 出雲市 佐藤まさる 同

> 四疊半四百字詰 耳飾りどんな暮しかぶ 形見わけ亡母の眼鏡が 喰ふ事を孫と樂 喰ひつめて発つ故郷の灯をすかる すぐわかる恋でも男秘めたが パチンコをボカンと見てる大晦 公と私と区分をすれば 爪染めた女淋しく生きて居 一号とも言へず吾が子をひき合 で生生 L t 父 煙 à 丁 5 な た て 度 か NO 合 h 3 3 h 4 出雲市 津山 市 久家代仕 同 同 同 同 同 同 同 司 香平 男

子供達手ぶらの客へ寄 人 卷 0 0 子 稅 鮭 務 で 唯 夫 0 祈 人 方 3 0 丈 から B 氣 3 b か T は 変 哀 カン b す n 高大田 市和 同 同 日本村

すきのない 急停車恋人 木枯しに問 女 去 屋 に育 T 8 寒 8 ち 押 6. 恋 顏 1: 5 ·C 來 な を 4 1-岡山県 同

越鳥

汗かいた仕事 忙しさ赤んぼ 軽傷ご見たか看護婦ま を か 見 泣 T 3 3 だ 犬 ま から 面 泣 た 3 き和歌山市 世 秋月 宏方

鬼さい さん付けで呼んでた頃はすぐ返事 H ふ綽名 号 もあ 跳 カン 5 n E H 社 恐 妻 す 3 家 京都市 同

聽診器今日 雌 伏 は 丸 心 川 1 0 当 ば T L > < か 17 n 同

三十

年

何日癒るのですことう

妻も負

Ut

香果

言 顏 2 で カン < 3 愛 知 県 同

寬虚

たしかに、ジャズは音楽の上に抽象化さ

國会の値上げはストもデモも無く

病人もみんな出

離婚しましたとス

1

忘年会坐り込み

L

た顔でなし

同 同

矍鑠と煽端

嚴

3 後

3

宅

^

汚

職

最 父

0

3]]] 柳

F

坂

朱

本において流行しつづけているのであろう が流れてこないところはない。「飲んで喰 われるジャズ音楽が、 つてけらは愉快だろう、明日は死ぬんだか 秋氏から頂いた。 日本国じゆう、どこもかしこも、ジャ という悲観論者の楽天主義だ。」と言 興味ある手紙を、私は 何故、 こんにちの

千日前のキャバレ 吉が、その芸術信念として、 ドでピアノを弾いている音楽学校出の礼 いるでしようか。 ……朝日新聞夕刊に出ている小説「レ ンの月」藤沢恒夫 1 を、お読みになって 「グラナダ」のバン あの中に、

近代の傷ついた精神のはげしい嘆きと訴 えとが切実に見出されたからだ……… しい芸術の優れた形式であり、 て行ける人間であり、そしてジャズは新 「……彼はこの世に音楽があるから生き (豆秋氏の手紙より、 但し傍点は筆 そこに

15																												
愚鈍だが熱のあるここ買はれどり	の大望えケ	太皷腹特に社長とまちがわれ	潔癖は男やもめを見せもせず	白い壁母を言ふ字を深く刻り岡山県	恐しや猫も生き抜く目が光り	母の顔みんな泣いてる子の画帳	べべ着せてやれば女の子ことで歩き兵庫県	スポンサー金の成る木があるこ見え	アベックが子宝夫婦を振り返り	野球さえすれば大学迄行ける鳥取県	嫁いびり何を寒々しい言葉	きゝ上手長者の長者たる所以	嫌がらせでもするように啼く鳥広島県	襷して今更狭い台所	せめてもの正月をしに山を降り	藝で顔だけでは白粉代くらい広島県	太陽も工業都市え來て汚れ	換氣塔廻つてわが家も文化めき	不器用な二人避妊を面倒がり岡山県	飲んだでは書かず宿直異狀なし	ホームラン又植木鉢一つ割り	共稼ぎ今日は熱海の宿で寝る吹田市	定額の電燈料だ消さずに寝	十二月僕はのんきな親がゝり	喰えてゐる証拠労仂歌の元氣	聞きわけてマ、さ一緒に死んちまい熊本県	末席の身分元旦直にあけ	貰いものですど十字架胸にかけ
同同	國枝	同	同	岡野風	同	同	森本	同	同	日置	同	同	田田	同	同	黑本	同	同	岡田	同	同	橋本	同	同	同	高野	同	同
	朴山			風の子			花子			文笑			桂角			芳泉			青果			幸男				育草		
初雪は子供の日記帳にありアリバイへ映画の筋も役に立ち	花森が見た大阪の悪いこと滋賀県	まづしさがこんな子供に靴みがき	階段を一段とばすほど癒ほり	血痰じやないかミスタンドきご灯は岡山市	あてにならぬ籤さえ当にする師走	お使ひに間に合うてゐる 三輪車	寝るどこもないのにビルがまたを建ち 岡山県	三等の船賃学者は確を持ち	襟立てゝ海女の肉体見ていたり	又しても一億にする子が産れ 貝塚市	腹空いた泣き方したのに父が抱き	嫌われた轉動だとは露知らず	將來は婿にする氣の子をもらい 岡山県	本ばかり読んでる夫がはがゆくて	闇米と知らずにボストン提げてやり	御座敷の廣さえ寒う坐らされ玉野市	祖母達者炬燵のふどん紺がすり	音痴めいた唄に手拍子 揃いかね	インタビュー再軍備には軽く逃げ 米子市	運動も仕方によると仄かし	エロ本を二号目につくどこへ置き	御自慢の多趣味で家は火の車岡山県	開店へ大工は裏でまだ削り	露地を出て電車が見えて走らされ	停電の昨夜のまゝの職場掃き岡山市	山陰の正月牡丹雪もよし	金貯めて経済市沢聞くもよし	忙中閑ありパイプの艶を出し米子市
同同	久保 和友	同	同	永吉 喜好	同	同	河田 五風	同	同	河揚 梵鐘	同	同	大塚美能留	同	同	渡辺あきら	同	同	勝田 正郎	同	同	池田 古心	同	同	宗高八ツ茶	同	同	小西 雄々

れた近代の嘆きそのものに他ならぬ。こんれた近代の嘆きそのものに他ならぬ。こんにち程、世の中に嘆きが充ちている時代が、かつてあつただろうか。新聞をひらくと、一家心中、自殺、収賄事件、大臣争い、原爆実験、その他うんざりするような 記事爆実験、その他うんざりするような 記事なが登場してくるのは必然の成行きであった。

ラジオから、石田一松の時事小唄「ヘッへ暢気だね」が流れてくる。内閣を四度びへ暢気だね」が流れてくる。内閣を四度びている。ではこの「ヘッへ暢気だね」の存在価値はどこにあるのか。それは、ベシミズム(悲観主義)の内容をもち、投げやりなオプチニズム(楽天主義)の型式をとりながらも、現実諷刺のひびきをもつて、りながらも、現実諷刺のひびきをもつて、りながらも、現実諷刺のひびきをもつて、りながらも、現実諷刺のひびきをもつて、りながらも、現実諷刺の内容をもち、投げやきながらも、現実諷刺のひびきをもつて、りながらも、現実調製の力できない。それは、おいのない悲しさへ人を追いやるのではない。何故なら、そこには諷刺が潜んではない。何故なら、そこには諷刺が潜ん

短詩型文学のうちでも、昔から嘆きの短いということになつていたようだが、この頃では、川柳にしろ、俳句にしろ、少なからぬ詠嘆調は、短詩型文学での共通の現象になっているように思われる。これは、うわべだけが似てきたというのではなく、近代にだけが似てきたというのではなく、近代にだけが似てきたというのではなく、近代にだけが似てきたというのではなく、近代にだけが似てきたというのではなく、近代にだけが似てきたというのではなく、近代にだけが似てきたというのではなく、近代にだけが似てきたというのではなく、近代にだけが似てきたというのではなく、近代においる作誌「天狼」の十月号を繰つてみると、いる俳話「天狼」の十月号を繰つてみると、いる俳話「天狼」の十月号を繰つてみると、いる俳話「天狼」の十月号を繰つてみると、いる俳話「天狼」の十月号を繰つてみると、

貧 農 鄉愁 占ひ 新婚の二人 師直になれ 御詠歌もちよいど杜切れるい景 失業保險ぎり~取つて嫁に行き 小きざみ 安いから買へと言いが氣に入らず 帰る氣 うばわれた足へ馴れないやない路 有名なあの代議士は專 吾が手腕知らずに仕事に難をつけ 課長ちどくたびれたのかめくら判 立話すればタクシー寄ってくる 醉眼 贅沢な書斉で賣れぬ詩 内静どすけどブギウギが近すぎて 旅ど言ふ意識千円まずくずし お年 若い妓が下戸の味方になつてくれ かけまくもかしこみバーの地鎮祭 行商の訛りまんまとしてやら 附添の酸へ済まなく箸をどり 宿やにも子が居て朝が派手に明 アベックの隣に掛けてい 炭鉱のストが 家計簿は服 まだ働いてもらふ氣父の野良 カレンダー一つ貰えぬ 0 えみかんの色が美 8 Œ の学 窓に昨 付 思 老婆袴に な足音冬が は ば ^ え女 名優まで 着でく 母 D 日の か 煙 匹引 すこ 靴 立 星 カン 3 父 をはき 迫 懸 0 0 を創 L 0 3 b て 卒よ 位置 3 かり 一着かり す 山 椅 0 樣 b 田 價 n 子 長崎県 石川県 兵庫県 玉野市 大阪市 愛知県 岡山県 大阪市 愛媛県 愛媛県 愛媛県 篠山市 國正田 戶川 迫田 中谷葉菜子 藤田 桑山 吉原 柴田 渡辺 村上 西川 酒井びか平 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 「美婦適 三吾作 晶子 博人 惠風 紅月 無方 旭童 曉童 とよ 星月 物わかり良いのに怒る腰 病人の顔せず堪へたパ ドライヤに堪へてた顔を笑われる 重患が看護 菊の苗まだ生きる氣の根 年賀狀 結局は誰が 青い目の子に振袖がよく似合い 先代の遺志にすまないパチンコ屋 兄の邪魔をこぼし履歴書はかり書き 智恵を貸す自信はあれど只 土運ぶ鼻へ匂ふた 誘惑は覚悟 誘惑が 怒るのも道理へ母は詫 羊羹が 顔見世のやうストライキ控へたり 正月の廊下へ 小氣味よく妻は税吏を追 パンしへへ任してどうやら宿がされ 菊活けてせめてくらしを飾ろうか 菓子見れば子はくると言ふいとらしさ 藁を取り手際を見せる 八百匁ほど痩せさせた 十二月ほれてる人に金 マスクして医は仁術の 最 注ぎ込んだ官吏あつさり カ くくし 後 夜 0 お好 藝 人待つ 教へて吳れた 漢文調をまだ捨てす 母 得 婦 0 尿 には母 き金婚 する 0) 橋を船 書 機 を捨 0 嫌どる哀れ ス で の流 ŀ 式 だ 3 てに 潮 び 顏 1 4 断 " 酒 8 くぐり y 0 t 戶 か を か 12 轉 分する ライ 5 拂 行歌 ゆく の恋 無 0 なる 物 ブ酒 折 入れ な 勤 田 2 す ひ 味 ガ 屋 丰 П n 7 n 貝塚市 滋賀県 鳥取県 貝塚市 京都市 岡山県 貝塚市 高大田市和 岡山県 岡山県 大阪市 大阪市 高大田市和 京都市 今治市 小田 土守 亀崎 堀井 岡本 穗北 松村 横田 岩垣 中谷 越智 戸田 清水ミみ子 美野百合子 同 佐久間折草 同 同 同 ŀ ~ 点子 黨 翠 柳叟 漫步 怠坊 方眠 卓兒 悅子 ン郎 2 一水 峰 坊

> という句があるが、この句からは、 じとれる。そのほか ながら、歪められた近代社会への嘆きが感 抽象的

とか、また、嘆くという言葉を使わないま 地に蟻の働らくかぎり歎くまじ

ところの人間の、ふかい嘆きと、やるせな といったような句が見られ、現実に生きる い吐息を、見てしまう。 遁るすべなく炎天に商へり 粗食して炎天に出て働けり 地位低く勤めまくなぎ蹤きまとふ 炎天や悲しき眼もて犬変か

酸切さ今日が限りのベンを取り 僕一人生きるスペース見当らず 耳に爪に国唇を感じ寂しくいき 川柳にも、嘆きは登場してきている。 衛を見よ汚れた白衣鉄の足 ました! 血を吐いているのにラジオは打ち 日給のみじめさスト権有りはあり ゴム印よお前も減つてもう首か 没食子 豆秋

ほかに、その性質とリズムの上から、ピエ ら川柳の場合、こらした正面切つた嘆きの 的な嘆きが、底を匍つている。しかしなが 向つた格調のある嘆きである。そこには、 ロの泣き笑いの渋面のように、 おかしみは見つけることは出来ない。徹底 たちで表現される句がある。 これらの句は、現実に対して正面切って 墓石の輜重一等兵悲し

代議士などに踏まれるな」の作者のこころ らわべは笑つているようですが、「春の草 は、実は嘆いているのだ。 国際でヘイヘイヘイとへこまされ

牛までがサンマタイムで起されて 豆秋 賣り

0

街を步

T

カン

山県

0

まく 出

悪 母

n

女 立 3

0

子 す

あ

T

金

要

+

月

同

T

1

T 3

> 月 ヂ

高知市

松

蘇

水

子供等を喰 次女嫁ぐ

わして出

して差

向

ひ

岡

山市

津

田

麦太楼

頃

1=

長

女

は

離

緣

3

n

同

+

バーを着

ても離され市

議

バッ

伺

弁当の小さ

0

3

、弊價値変るを保険屋

П 伊

13 達 CK

せ 0

す 中 す n

大阪市 岡山県 大阪府

中江

破

天荒 不漁

皇后に負け 新調の 看護婦に殺 初恋は映画 ぶさい くな 助産婦が集 税務署が帰り疲 終止符は臨時 元旦の火鉢に荒れた手に 氣の弱い あばら家も我が家と思 奥さんの事には触れず逢いつづけ 飲めばぐうたら醒めればひとの父 ポリスも人の子パチンコの話をし 官費旅行又出來そふ 遅刻するバスで恋しい人に なすび歯の君を惜しむに 女房が死 因 そどかねを笑つているよ 無駄をしに生 罐詰を切る 月給のあくる 恩 習 福 一云ふた間借首吊りあ 会 1= を 恩 勝 男に 0 イン h 日 0 10 文 から F. つてけなし 8D 師 T 本 で 1= 笑つて せりふま 3 茶 句 自 12 れて來た 3 す 昔 世 8 H れか 1 尊 貞 から 0 h せ 長 間 夫 休 0 1 0 ŀ 1 効 立 60 操 0 3 男 は どつ ス から 0 to 顏 70 0 强 肥 T ぜ 雨 な 肥 Ė 4. 狭 カン 手 癖 つつた部 ス 氣 T T 過 5 避 を など思ひ 6 T か なっるし柿 3 犬 再 余 を V 4 10 から トなりき 逢ひ 0 呼 受 h よ 姙 H n 云 軍 あ づ ス 帰 な 賴 撒 0 5 T ひ U. 3 L 樂 服 à 3 E " 3 備 b Ut h h ž 3 岡山 和歌山市 尾 高槻市 岡山県 高知市 貝塚市 京都市 津山市 岡山県 大阪市 山 布 岡 道 口県 県 市 哇 県 渡 富永 光 滝谷 岡本 進 三谷 同 高 東 田 西 長宗 藤井 近江 同 同 同 同 同 滝 同 藤良畔子 崎 П Ш 今日坊 靜臥 右郎 四 元馬 雄声 志郎 節子 柳蛙 純香 水子 白鬼 呆声 詩 逸

封建

学もない 大晦日 先 6 はけな希望それすら無理を云 奎 う 2 ナルの方へ寄ってくアド 敎 雜 癖に え 談 子 b 稅 カン h カン 6 許 吏 一人に明日がある 6 0 b 0 0) 事 0 生 賀 務 年 意 狀 氣 初 賀 から な 來 狀 点 豊中市 岡山県 大阪市 堺 市 丹波 神谷凡 太田 森 同 同 九郎 叉洲 太路

小

一つ買うに事缺

<

暮

U

向

à

貝

塚市

新聞を見ただけ 失業手当菊 手習する子 末期でも知らず入歯を仕替える氣 の日本 心 1 の世話丈 E カン 若 隣 城 3 か で カン 見 建 晝 Ut 5 0 3 年 0 ス せて吳れ 2 U 0 + ナニ 5 暮 包 n h ひ 岡山県 赤穂市 大阪府 JII 富 森本黑天子 同 同 同 西 岡 去水 青柳

初

雪

子 V

は温度親 ツチする指

は

株

價

0

郢

を

引 す

3

大阪市

佐野

牛步

初

老

を

意

識

同

家の良心の痛みが、最大のモチ

フになっ マンな作

現実のくらさに対するヒ

2 1

いるのであつて、それ故に、これらの句

嘆きが渦巻

いて

女 何

和戰 手土産 ネクタイを結び百姓ども お茶屋から蔵 捨てるよふにどつがして元の夫婦 様々こんな世 残 のもなかくさして社長喰ひ つさず ひ 暮 8 を 間 0 造 0 母 子 3 見 1= を 社 九 育 用 な す b T 族 岡山県 滋賀 大阪市 県 森永 花柳 同 岡 力 亀 天明 山 子 7.

と思う。 あるのだ るところ いから支 さを、 な意義が かしてい として活 えて諷刺 かなし 大き 笑

も、この笑いの底流には、 破防法通過バチンコしてるまに 啄木でなけれどデッと手を見る 税金をしぼられに生れ来たような 一見瓢逸的である けれど 同同同

な意見だと思う。 という箇所があるが、 持つ皮肉諷刺の痛烈さの故である。 柳の持つ笑いの上乗さの故であり、 かれているなかに ているものと祭せられる。 を捉え、 出現を要望して」と福田山雨楼氏が、 川柳の持つ批判の鋭さの故であり、 柳雑誌の昭和二十六年十一月号に 民衆に支持される所以 「……だが川柳が民衆の これは、非常に大切 名 JII 説

ジャズの、単に ローグ的存在とはちがつた、 川柳の嘆きは、 嘆きつ 虐げられてきた 黒人音楽 放しの無力なモノ 現実面からく

るところ 金融 瓶 大阪市大党區長柄 西進一丁目刊四 山銀硝子株式会社 常路梯川四四七番

仮裝会のにはか乞食が良く似合ひ 手傳つてお客の意地に腹を立て

貝塚市

歲月

大阪市

加川 竹內

私

好きな酒も飲まずに貯めて頓死をし

岡山県

福島

柳の

の指導者菊に過

す午

鳥取市

德持晚稻子

産制が何うにもならぬ

若さに

居 後

熊本県

鹿本

実信

友

茶柱にかゝわ

りもなし

風

0

晋

京都市

鈴木加代子

木 天 郎

ら僕の雑詠として、初めて活字と

この二句は、昔山陽柳壇に大阪か

れ僕の名が掲げられている」との を見て、「古い川柳雑誌を見て呉 去年僕の机に乗つている川柳雑誌 見てても川柳の話が出なかつた。 四年、電話で或は打合せに、顔を だと云つて互に雅号を名乗りあつ 事で、それでは山雨楼氏でなし誰 なつた。それでも互に知らずに十 庁に、それから一層交際が繁しく て居つても川柳の事は聞かなかつ めて、互に事務の連絡に、交際し 府の学務課に僕が市の学務課に勤 る。これから永久に柳友として雑 た。まことに川雑なるかなであ 温泉に宿泊してたのを雑誌で知っ 泉に遊んだ日に、丁路さんも同じ それでも僕の娘が津山郊外湯郷温 なつて益々友情が濃厚になった。 生に入れてもらつて不朽洞会員に 政名)知らなんだ二十年、葭乃先 た。丁路と美夜路 た。君は今宮職工学校に、僕は府 福田丁路さんと私、それは君が (後に摩天郎と

席し、路郎先生に師事するように 川雑鑑青支部に参加したのが機縁 呉れたのはこの柳友なのである。 兎も角も川柳入門の扉をたくいて でも無く気の向くま」に二人で創 る。その頃の私は作句を発表する なつたものでなつかしいものであ かれ僕の手に残つた唯一つのもの なつた。戦争で営業所も倉庫も焼 となつて、川柳雑誌社の句会に出 小川京詩君と一緒に中見光路氏の ろうつ 誌に、会合に、結ばれることであ

III (2) 柳

生 活の 內 助

つては楽んでいたのであつた。

出勤のせめて寢顏を見

て出かけ

金沢市 大阪府 大阪府

篠原古戰場

武

部

香

林

大橋

溪泉

小池しげお

ぎる

唐沢

京都市

星野

侑正 京花 常雄

は川柳であつた。

L

岡山県

千流 塗杖

大阪市

長田

競輪のファンをおだてるアドバルン 意地捨てゝ行けば茶菓子も出してくれ

まぶしてお彼岸団子を作つている つた。前身は巳いさんか狸公であ り吸いもせぬ煙草の良さを発見し 題が出ると、煙草の輪を表現した でも尻に帆掛けて、岡山へ帰ると ですばしくやつたとしたら、何時 うになつてからも、僕が若し煙管 たこともある。結婚生活をするよ げてしまい、母親が不思議に思つ るほどなのだから、こそーへと迷 しろ煙管に触れるさえ嫌悪を感ず と云われて、大恐慌を来した。何 母親に、一寸一ぷくつけておくれ た。十五六才の頃両手をとり粉に つたのか、異状な煙草嫌いであつ は愉快である。 ようとしたりするのだから、川棚 も買わなかつた。それでも煙草の た訳でもないが遂に一本のナタ豆 云うのであつた。僕もそれに恐れ 僕の最初の柳友は妻の若菜であ 幼い頃から大の煙草嫌いであ

街錄

にストの

余憤

を小

企

業

古蝶

玉露

1:

見

え

くな か

卯之助

P

奈良市 宮崎市 岡山県 松江市

絹下 野口 整理旋風身近くそれて年 子供にもおろして貰うへぶ

は

ゆく

出雲市

沢田 菱川

吐泉 正美

將

棋

津山市

盆勘定にしてくれど云ったが盆を過ぎ 見えぢやない子の進学も飯のため 始発バスもうホロよるの年始客を乗せ ウイスキーへ羽織袴も酔うてゐる 音樂会船こぐにちど高す 夕暮れに帰る我家の灯がうれ 愛妻を恐妻ボーナス袋ごと

岡山県佐 島根県

*部滿佐志

鳥取市

泉

北鳥

元日やなす事もなく睦まじさ

岡山県

死んだ児の顔を見つけた夏祭

膝の猫ダイヤの指でなぜら

n

3

高大田市和

戶田

嘉一

女房を貰

つて

かい える らは

不

精

京都市 京都市 裁ち台へけがれを知らぬ 継母の末案じます叱り 子が思ふほどに世間は甘 今度目の間借窓から富

裾模

樣 5

岡崎市

床でくれ床で迎

初

日

0

出

中尾 稻本

> る。 が、僕はそれと反対であつた。こ らない。一朝わが家に事があれば ものであつた。薄暮に打ちのめさ の川柳生活の内助をもつとめてい が、朝な夕な川柳に触れしめ、僕 の柳友は遠慮のない批評もする 川棚から遠ざかるのが常である どれだけ心をほぐして呉れたか判 する僕に川柳の話を持ち出して、 し中小商工業の生活は誠に苦しい れたようになつて、ムッツリ帰宅 敗戦とともにわが経済界は激変

ットーは、愉しくも続けられて行 によって、川柳即生活の僕のモ 斯くして今日恵れた多くの柳友



×

母の年くつてこたつを買って来る

妻揚 伊

> 魚とる猫でも主人は可愛がる 側にいた不運猫まで叱られる 捨てられた膝とも知らず猫ねむり 捨てさせる猫を娘が抱いて寝る 懐へ文士仔猫を抱いて出る 別荘の猫が鰯を盗つて逃げ 床下で猫は何日しかふえている

> > 悦

嘉

ておしやべりに出る女なり

津志

残業の子へこたつの火入れ添える ライバルと知ってこれつの目があわて こたつから夜業の母が使はれる 冷え性をなげきこたつの火をいこし こたつから用事を頼む日曜日 こたつから棚の枯れたのを眺 火の消えたこたつは嫁のせいにされ 後悔はこたつの中の軽はずみ 夜業から帰つた炬燵母があり 老いらくの恋は炬燵で向い合い 置炬燵スキーの話寒ら聞き 炬燵から出した寝間着をきせてくれ 踏台にして叱られる置炬煙 こたつから行商すげなくことのちれ 読み手だけ一人こたっへ寒げに居 大欠をあけてこたつの子は出かり 正月の天気炬燵の中 こたつ子の宿題へ首を振り でほめ

恵二郎

介

炬 燵

こたつから一人出て来たかくれんは 置ごたつ妓崩れるように来る 正月がもうそこに来ていることの

そうでしたなあと炬燵の老夫婦 田 久 米 雄 選

三林坊 代仕男 雨楼 しげを 天・一 軸・置ごたつゆつくり話すことにする 人こたつ出た一人なんなとて使い 地・こたつから叱言を聞いている寒さ 五・気かつくここたつが冷える十二月 五・あみだくじこたつを口惜しがって出る 五・いい話こたつの中で耳を立て 五・こたつ思えば恩愛の深かまりき 五・こたつから猫も一しょについて出る 子の寝顔こたつで思うこと多し 風の子が泣いてこたつへ甘ゑに来 こたつから飛び出た程のよい土産 親子四人こたつに坐る位置をきめ こたつからロ八釜しく指図する 毎年のこたつが同じ位置につき 南天の実がこたつから見えて飲み どうぞどうぞとこたつへ先に入り 年の計は こたつ二号も猫も良く眠り こたつで考える 八ツ茶 久米維 青 八ツ茶 山雨楼 美能留 十九平 陽 鲇 一点子 維 鮎

炬燵まで雪見の燗がとどけられ

燧から子供気易ら使はれる

斗病の長く馴染んで来た炬 炬燵から呼んだ御用を聞き流し ドランプを負けて来たらし炬燵へ来

業を母の炬燵が待つてくれ

猫

呆 満

声

山

年

悦 柳 正 2 意

川 紫 香 選

そこらまで猫を探しに出るも母

沢山猫の食事はわすれ勝ち

質はれる猫に出し雑魚添へて悪

天 泉 蓉 年

隠居所にきっ化けそうな猫が居り

野良猫にずるく

~ご居据られ

捨てた猫胤を宿して戻つて来

破天荒

借りて帰る膝から猫が降り 話猫を抱いてるのが二号

英 木

子

の限に夫婦けんかを見つかられ 物の様に茶房のベルシャ猫

黒猫に赤いリボンを買うてやり 打ち水で隣りの猫を追い帰へし どら猫が僧らしい程よく太り 仔猫だと思っていた。に家を明け 綺麗好き猫の素足は気にかけず 安くない話に猫は膝を降り 玄 巾 の子の鈴の音色もいゝ育ち 関が鳴れば小猫の鈴が鳴り をわざくよけて猫 Ł 9 美能留 一点子 七面山 一三夫 しげを 雄 舟

夢 方

眠

五

宿 猫の子を上げます張紙質屋の灯 捨て猫を家の子だけが拾つて来 猫 猫 猫の子を上げます優しい女文字 名月へ猫物干を動かない 三人でらつす写真へ猫を入れ 妾宅 花 嫁の衣 裳 で猫 を抱き上げる 猫或る日鐘へそつとのび上り 猫までがともに大きな欠伸する 農繁期 柿むけば柿を匂ひに 奥さんの里え小猫もバスに乗り い」毛並だけを残してみんな捨て 野良猫は年期を積んだ逃方し 子が無いご淋しい思いで猫を抱き 質い風呂猫へ土産を持つて行く 居部屋覗けば猫が丸ちゐる 直 好きの妻で子宝恵まれず か へ隣の 出 K 飼れて て行けば風が駈 猫のんびりと日を送り 猫が遊びに \$ 猫が来る よく肥り 廻 今日坊 愈 花代子 十三楼 鮎 呆 天 光 ٤ 同 格 正五光 水 美 坊 船 声 郎 1 男 五·猫 五·置 地・さかな屋の猫悠々とさかなを見 人·金 五、立 天・料理屋の猫はやさしく叱られる 五・遠火事へ猫も屋根から降りて来す 五・捨て兼ねた猫三匹も子を生んで

よい天気猫のあくびをうつされる

内職膝を払へば猫上り

月

0 独

身線へ猫

0

日当りを選って仔猫を捨てく行き

々の里で育てた猫を抱き

質 作 TACHINAWA PEN 大阪市東区豊後町四八 立川商事株式会社

Œ 古 南 穷 季 満

則

代仕男

猫が居て余生静かな日が続き 猫の手も借りたい時に邪魔な猫 母の柩が出てから猫が帰つて来 孫と同じ様に坐つてゐる小猫 猫通ら障子の隅は明けて置き 課長さんで余儀なく猫を貰うて来 水藤鉄一鮎夢八莠山一寬青方容波児夜美介茶花楼瓢虚雨大 伊津志 葉序天郎

※「一個女子の一十一人」

初鰹代と江戸通貨(上)

阿 達 義 雄

の得意のものであったらし もピチピチした初鰹を喰うと 鰹を喰う、女房を質に置いて 象づけられている。就中、初 句は今も人々の脳裡に深く印 視覚・聴覚・味覚で現した俳 云うのが、江戸つ子の得意中 ど、江戸つ子の誇と意氣を ●目には青葉山ほとノぎす (山口素堂)

参照してゆくことにする。 拾い、併せて江戸小咄などを を詠み込んだ句を、主として そのために、初鰹関係の川 戸後期、即ち古川柳時代の貨 柳・狂句の中から、特に貨幣 の値段を問題にしながら、江 に就いて説明してみよう。

先ず、句に詠まれている初 今、自分は江戸時代の初鰹

> たのである。 江戸つ子の威勢の良さを吟じ ども主食ではなく、單なる飯 どしく一賣れること、叉高く 茶に過ぎないと言い切る、 どんなに高値であつても、 〇初鰹百貫しても飯の菜 ○御代豊か百貫しても初郷 〇初鰹百貫しても売れ足ら でなくて副食 如何に高価でも主食 (二二:明)

〇百両はしまひ見せろ初 一「いくら高くても、 らア。」 まい。どれ見せろ其 まさか百両とはする の初鰹を、買つてや

た値段、つまり銀百貫目と解 げたのは、それを銀目で示し 扨て、百貫の二句を先に掲

のもので、実際とは総遠いも

價であることを形容したがけ 鰹の最高値だが、之は單に高

> は総べて、徳川時代の法定比 川柳・狂句の通貨句、物貨句 狂句に於ても、銀目で詠まれ 地であつた。從つて、川柳・ あり、京阪は銀貨幣本位の土 体に於て金貨幣本位の土地で 文と考えなかつたか江戸は大 ある。何故上記の百貫を百貫 れていないことを知る必要が 價変動の影響は、数的には現 四貫文(四千文)の定式に拠 價たる金一両=銀六十目=銭 が高値となる。『柳多留』の 百貫文を解すると、百両の方 したからである。もし之を銭 つて詠まれていて、実際の比

思われる。たそへば近松の ていう場合の百両の様に。然 の語原から移つた言葉の様に し、この百貫は元來関西方面 提灯、南京の八匁から九匁を 対、表具ばかりも百貫に編笠 「爼板仏壇何や狩野の三幅

具」などの語は、みな其の基 從つて、「百貫のかたに編笠 一つ」「裸百貫」「百貫道 の百貫などは銀目であり、

> た相当の財産として見られて の予想がある。銀百貫が纏つ 太永代蔵一卷四の中に、 いたことは、井原西鶴の『日 底に、それだけの銀目の價値

段であつたかを調べてみる 際に於て、初鰹はどれ程の値 水寺に、呉服所の何某銀百貫大絵馬掛率る御宝前洛陽清 川柳に現れたのでなく、実 名をしるして懸けられし」 目を祈り、其願成就して是に によつても知られる。

三両をなさず、古脊も式百孔に過ぎず。今は初鰹も式両 ん。」(文化三年『蜘蛛の糸 の物なし。いかなる故やら 至りては、肥大なるも価二百 は高価なりしが、秋の古脊に りと云ひしとて、立ち帰りて 今日は安し、壱本式両式分な 魚屋常に持ち参りしが、初郷 にありて聞きし事ありき。 我が父へ語りたるを、我等傍 林が手代に価を尋ねければ、 り。初鰹の振舞に逢ひし時、 おとろへ賤しきくらしとな 松右衞門、石町の豪富林治左 我父鰹を好まれし故、出入の 衞門が許に至り、今は此大家 「天明の頃、我家の長臣渡辺

様なものではあるまいか。い

処の、單なる高價の代名詞の

の百貫は、庶民の眼から見た ている句は極めて尠い。前掲

蛛の糸卷』には 尚、燕石十種本所牧の『蜘 「天明寛政の頃は初鰹といへ

> 金三両もて換へし」 **着し日は年によりて鰹一本価** ば、甚価尊く日本橋へ初船の

のであろうか。 る。筆写の間に異本が出來た され、文章も多少異ってい どいう言葉でもつて書き出

つて差があるが、平均して考 十六編から第二十二編迄成 要するに、天明の頃、 置いて頂きたい。) 両前後であつたことを念頭に えると米一石の値段は大体一 (尙、江戸後期に於ては年によ (天明年間に『柳多留』は第

判と言えば壱両である。 るものであつて、江戸で、小 文学に於て、極く稀に見られ 学者があつたが、それは上方 往年、「一分判をも小判で言 判で買わねばならなかつた様 るに足るものは、何枚かの小 ふこさあり。」と論じていた である。小判は一両である。 て、江戸つ子の間に於ても誇 天明時代の万句合の中にあ には、初鰹の中の初鰹をし

〇二百が買って二両の気で

尤も、二百文で買つて、「二 際を反映していると言える。 と云う句は、上記隨筆の実

宝暦頃の句に、 初鰹一両迄は買ふ気也

く出てくる文句である。

だ。 は、江戸つ子らしくない様 両」の氣持で喰ったがけで

よく似ている。 なくなつたのと、其の傾向が 子の槍玉に上げられている伊 は、吝嗇漢として、始終川柳 ……驚くべきことには、それ 價を買つているものは、…… は、揚代の高い遊女が買われ 高いのを買わなくなつたこと と時代が下るに從つて、余り 川柳に於て、初鰹の最も高 初鰹代も文化・文政・天保

勢屋である。 〇三代目伊勢屋鰹に式両出

戸つ子の端くれである。一戸に三代住めば、矢張り江 若旦那で、伊 家で唐様で書く三代目」の 顔を出す筈もなく、所謂「賣 の伊勢屋などが式両の初鰹に 勿論、初代の伊勢屋・二代 勢屋でも江

〇金持と見くびつて行く初 (八〇) (五二)

こんな不経済な魚を買わなか 体、堅い金持というものは、

つたど見えて、

と詠まれている。 ○初鰹なぜ金持にきらはる

> た初鰹と言えば、小判一枚、 或は一両前後をいう処である どあるから、先ず氣の利い

南鐐二朱銀などからは、決し する、言い現し方であって、 うしても、薄いしかも相当の と投げる」という文句は、ど て出ない感じである。 短冊形の二分金・一分金或は 廣がりを持つているものに対 かく言つたもので、「ひらり 黄なもの」は黄金色を柔 〇黄なものをひらりと投げ てべろり喰ひ(一三二) ー「ひらりと投げる という語気は小判。

〇そこが江戸小判を辛子味 〇四月上旬に小判を味噌で ー小判のお化けとも言う 鰹は辛子味噌をつけ て喰ったことが分 は陰暦四月上旬。 べき高価な初鰹、時 (十二十) (三五)

は、江戸子の江戸自慢に、よ 「そこが江戸」というの 〇そこが江戸小判の鰓を犬 が喰ひ 小判の鰓……実は初 は飼犬にやる。 鰹の鰓。魚の頭の方 (1111)

> 〇小判のはしと中落をある だ、捨てるなど勿体 ない」と言つて、良 て小判の端つくれ の部分を「これだつ つて了つた中落の骨 初鰹の両側の肉を取

○堅い魚小判の借りを喰ふ 借りて買ったので 堅い魚は鰹。小判を 家の使い歩きをして いにくいわけ。 は、成る程堅くて喰 いる者が煮て喰う。 (大三)

○桐が八ツ出る鎌倉のはし り魚(一〇五)(一一八) 戸へ運ばれる。 初鰹は鎌倉辺から江 「桐が八つ」は鎌倉

掛けたもの。 幣の桐紋の極印とを の桐谷の地名と金貨

ある。 とは言えない。銀の場合は ないのである。從つて「桐」 割合に簡單だが、『柳多留』 「分銅」と言つているからで いうのは、南鐐二朱銀の外に てをらず、この頃の二朱判を るど、八片で一両になるから のこの頃には二朱金は通用し 之は、どうせ狂句故、あつ 此の「桐」を二朱判を解す

> 考えれば川柳的には一番びつ 金四個で桐が八つ即ち一両と 二つづくついている。一分金 て、一分金には桐紋の極印が たりする。 貨幣を見ると江戸時代を通じ 釈してもよい
> き思う。
> 実際の さり一分金八ツ即ち二両と解 一つに二つの桐だから、一分

の者には、 買うのは極めて、限られた富 裕な階級の者のことで、一般

〇本性になっては喰へぬ初 ○その値では裕があたらし 〇はじめには歯の立ちかね る堅い魚 く出来る (八六)

何しろ、一両前後の初鰹を

〇半台に御光の様な初がつ

「半台」は当字で、 正しくは盤台叉は飯

(一五五)

松魚

○財を喰む如しと儒者の初

〇松魚の値卯の花売はウッ

たまげ

(三二四)

の商い故、一両二両 の高価には驚くわ

麻 生 路 郎 著 水 武 書 房 版

ろうつ

盤台であつて、拝ん ころ。恐らく鰹売の

だだけという処であ

あるし、飯台なら、 ら未だ魚屋のもので 台であるが、盤台な

既に買つて食べると



川柳を研究したい人にも好適の書

取次御注文は ある。敢えて一読を薦む。 ことが出来る。多年川柳している人たちにとつても又好参考書で 者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコッを会得する かから」説き起して収むるところ三十七講、平明で、親切で初心 指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなもの 本書は著者が多年ウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新 B六版 (二二二頁) 改正定價一三〇円 大阪市住吉局區內方代西五丁廿二五 十六円

柳 誌 社



投稿規定

十二月十三日 師走川柳大会(大阪) 午後五時半 光明寺

則·白溪子)大鉄局支部(杜的·水客 会九時。対抗句戦出場の選手は次の通り。 カップ把持者は馬場夢生氏であつた。閉 負となり軍配は白溪子氏にあがつた。次 勝まで漕ぎつけた夢裡氏と白溪子氏の勝つて、残る顔、退場する名選手、遂に準決 ら、柳談を交わす者、句箋を睨む者など 楼島支部(一瓢・一球)天王寺支部(正 て登場、作句時間は二分間、白組、紅組共 戦の幕があがると各支部選手は鎬を削つ 朽洞会理事長中島生々庵氏の歳末の挨拶 た。民かまど本舗寄贈の名菓を味いなが 押しとなり次の間にはみでる盛会であつ に席題兼題の披講、当夜の不朽洞賞優勝 に一回戦から三回戦迄、行司の篩にかか に続いて路郎師の漫談があつた。対抗句 で会場は火鉢も要らぬ程暖かだつた。不 を敷きつめた大広間は開会間際には目白 早くも会場へ詰めかけた。一面に座布団 になった。撰ばれた選手と応援の面々は 抗句戦は当師走川棚大会から復活する事 戦後暫く跡を断つていた川雑各支部対

会(孝子・博也)玉造支部(喜久堂・都史・弾正)大和支部(白香・緊光)交助

出席者=路郎・文蝶・没食子・淡舟・正 巣・酔歩・抄児・少将・京子・島人・発 弾正・緑雨・孝子・恭子・清潮・帆加胡蝶・小柳子・紫香・一点子・凡九郎 錦風・世津子・一十・ひろし・春斉・ 鳩花・博也・梨里・葭乃 子・三司・亜鈍・野介・貞女・迷路・ ち・花村・比呂史・太希志・夢生・俊 恒明・春柳・万楽・貴山・義英・へと 水堂・春巣・里十九・生々庵・小秋・ 京花・香林・豆秋・梅里・幽王・弘・ 圭三・しげお・賢二・ゆづる・一球・ 夫·翠光·白香·莱·雄声·正司·水 喜久治・愛論・喜久堂・小松園・好郎 都詩子・一瓢・夢裡・摩天郎・潮花・ 則・黙平・笛生・嘉一・悦子・旅風

夢破れ強盗といふ群に居り 強盗へ君腕前はどうしたね 強盗へフラッシュえんりょなくあびせ 強盗の訴へるなと繰返し 居直つてから清貧の家と知り 強盗もやつばり弱い人間だつ 手も足もしばつて強盗酒も飲み 盗」麻生路 郎 万正文愛豆夢黙胡潮野恒弘日 水香正 本村楽司蝶論秋裡平蝶花介明 選 満 子客林則

> 強盗の情婦と云ふが写される強盗も落目の家と見て帰り 強盗にやられた話大きすぎ強盗でも私は彼を愛します 強盗の気持も判る十二月強盗を泣かせて女将写される 強盗も洒落れているのは飲んで去に ごうとうが人の情を知つたよひ 強盗に外は身を切る風が吹き ふと棚のイエスに強盗瞳をそらし 植込の中で強盗除夜の鐘 強盗未遂聞けば同んなじ子沢山 強盗に鉄窓があり恋があり 強盗の不敵酒まで飲んで逃げ 強盗が来たらやる気の御寮はん 強盗へ膝をくずした未亡人 強盗として友の名を植字する まあ坐れと言われ強盗慌て出し 雁の列乱れ強盗寒くなり強盗に凛と対した賢夫人 亡母に似し顔に強盗ギョットする

兼題 村松夢 裡

水を切るチロリ溜息ととのでる 母にだけこの溜息は聞かすまじ だめ息をある日鏡へついてみる 溜息の横でつぶれたしやほん玉 溜息も術のうちにある 赤い唇 わざとらしい溜息ついてじらしてる 溜息がつまつて三面記事になり 耳輪だけ恋の溜息知っていた まゝごとの溜息母のボーズなり 溜息の母へ乳房の児がせがみ ためいきにゅれる鹿の子の水々し 溜息へ要は楽観主義であり 智息も重役らしい応揚さ 不渡りへもう溜息も追つつかず 溜息で風船吹けばい びつなり 溜息へ母親一人気をつ 百貨店溜息をして見て廻り 白柳子 H 本村 選

裡し鶴町支部(胡蝶・小柳子)南海鉄道 部(小松園・梅里)京都支部(小秋・夢 逓信病院支部(愛論・没食子) 阿倍野支

招かざる深夜の客に只震え 強盗の一歩手前で母の顔 強盗が来たら四五万やりなさ 強盗の目にこの辺も犬多し

源日

強盗に月はロマンなものでし

西成支部(春柳·幽王)梅田支部(正司·

あつさりと出され強盗もちとふるへ

強盗があきれて帰るほど貧し

強盗の耳に初発の走る音 さあ持つて行けに強盗気を抜かれ 強盗の気持そらしたいい女強盗の気持そらしたいい女強盗修々朝飯まで食べて

強盗がぎやくに女将に居直ら

三司)堺支部(好郎·摩天郎)淀川支部

(花村・水堂) 池田支部(ゆづる・圭三)

脱税をののしり強盗義賊 の気 路夢日小悦春紫小白正潮代幽嘉幽悦恭醉白一淡葉 满 郎生子将子巢香将香則花男王一王子子歩子十舟光

溜息を紙治がつけば美しく 売出しへ仏具屋だけが淋しそう 溜息のそれから女の 溜息は一人ぼつちの台 溜息で帳簿ばたんと閉じられる 溜息をまともにテリヤ尾もふちゃ 溜息と欠伸茶の間のお茶が冷へ 溜息と一緒に腰を上げてさて ボーナスの袋溜息受け付けず ひとりでに出る溜息も十二月溜息も寒く夕刊売れ残り 溜息の背へ友情の手が伸びるしあわせなため息こせで聞いている 倖せな溜息が出るほどきもの 溜息の恋とはこんなものか窓 習息へ火鉢は消えたま、置かれ 溜息が火鉢を丸うかこむ宿溜息へ破れ障子の隙間風 溜息へ鏡がくもるみだれ髪 溜息へ雨がしと~~降りはじめ 溜息の煙草は消えてゐたまんま 溜息をついて思案のマッチする 溜息を殺して見てるストリップ 溜息へ心直しの燗が出来 溜息へ要は一本つけてくれ ネオン明滅溜息みんな聞いてるた 溜息をネオンしきりに招く客 倦怠期ホット溜息長うは 待ちわびて溜息の出 履歴書を書く溜息の 溜息の奥から洩れる 高 もう死んでもえ」と溜息をつき 行列で待つ売出しの素晴らしさ 落葉掃く僧 溜息を洩らす妻には強さあり 溜息をついて算盤おきなお 息へ要来年を慰める 出し」清水白柳子選 肚が出 山る長火 墨をす 3 へとち

ぎつちよ笑ふな君書けるなら書いて見い ぎつちよでも女座長の切りっぷり 左手で茶濃かき込む鮮や 不覚にも見合にぎっちょでお茶をつぎ 「ぎつちよ」須崎豆 かさ 秋 都詩子 ゆづる 夢 選 明

失業の身に売出しがにくらしい 北風に乗つて売出しまともなり 大売出し七年と云ふ日の歩み 売出しへあきらめまむし食べて去に 不景気だんなアと売出炭をつぎ 売出しへ気兼しながら道を問ひ 売出しでみかんの皮をやたらふみ 売出しの街履歴書を持つて抜け 売田しの旗薄給の限に巡みて 売出しも師走はどこか殺気染み 大売出し隣に負けぬ声になり 売出しちゃストなや火事ちゃの今年暮 売出しの中に愚妻も居る人出 売田しへ母も女房も助けに出る 売出しのレコード場末らしく鳴り 妻の目に売出し安い物ばかり売出しで高女時代の友と逢い **丼池の売出しこうも** 売出しが何だボーナスさえくれず 売出しの特価へ予算超過する 目転車を下り売出しの衝歩く 売出しの街に医院のガラスドア 売出しのそとからサンタ引返し 万引も予算に入れて売出され 売出しの均一物へ立つ迷ひ 売出しへ売手はかりが張り切つて 売出しが供米代金浚ろでゆ 売出しの停電何か盗られそう 売出しの外れで閑な易者の 発出しをして売出し見て廻り 党出しも地味に老舗の紺のれん 売出しの街でサボつ た子に出合い 犯出しへ景気のつかぬ買ひ気薄 **売出しの種はつきない** 百貨店 出ばかりの売出しを見て帰り 旗をたて 白抄万香日 柳 子児楽林村 夢水京香没好太清博紫日春豆比酔義旅 食 生客花林子郎忘潮也香子巢秋志歩広風 一胡 比呂志 一三圭一水 満 点 子司三飄 堂志 翠 光論 子

炭労のストが夜なべを続けさせ 晩酌代が高くつく父をやんの夜なべ 八時間終えて夜なべの 晩酌が妻の夜なべへ狭う居る 素もどんが届く夜なべの町工場 夜なべして子供がかるめゃいてくれ 越冬金どころか夜なべ夜なべなり ドスンーへ夜なべ隣りの子供泣く 銭湯で夜なべ同志の愚痴を聞き 借して夜なべのミシンに寝せてある なべ」 共稼ぎ 武部 香 彈生恭幽正世正正島 津 正庵子王司子司則人 林 嘉弹生恭幽正

落 L

勉上田

邂

子楽

仲人はぎつちよの事を云ひもびれ ぎつちよたること連れ添うてから判り 末つ子はぎつちよ紙きる事がすき 里帰りのびくくぎつちょめしを食む 童心になってぎつちょで子の相手 うどん食ふぎっちょを見てて屑がこり 爼のぎつちよは別な音がする 判を押す社長のぎっちょ見附けたり 試球式ぎつちよの球は高く飛び 神童と呼ばれぎつちよに子を育て みてる方がやくこしゆなるぎっちょ 犯人はぎつちよとにらむ刑事の眼 うちぎつちょきすえごめつちょわるびれず 射的屋の娘を笑わせるぎっちょなり ホームラン打つのは何時もキッチョなり ぎつちよの子も一人まじつた子沢山 ふるさとを母校をサウスポー担 ぎつちよをまだるく見てる台所 年寄りに嫁のぎつちょが気に入らず 天井の釘をぎつちよに打たせた。 パチンコにぎつちょの台が一つ欲し 薪割へぎつちよの癖がふって出る 自分の名はじめてかける子はギッチョ ぎつちよかと問われ笑った返事なり 左利きはたで見る方がしんでがり ぎつちよから飛び出す球へまどわされ 一人子のいつの間にやらぎつもよにし のこぎりのぎつちょは少し横にそれ 集金のぎつちよの手元見つめられ が 左利 豆三小生夢幽万小旅正翠春 秋司秋庵生王楽園風司光巣 自ゆ島夢小雄清夢 柳づ みる人生子声潮裡 旅正翠春菜愛夢淡 一緑錦 水 点,所風 論生舟 客

落し物社内を探す拡声機落し物巡査さたなくつまみあげ

落し物女をろく一訴へる老夫婦何か落した慌てよう

一ン十球

満員の裾かき分けた落し物

落し物中身が言へぬので困りががかいてた落し物ががかいてたる落し物

電柱に手袋一つまだ掛 落し物飲んで御酒が罪を負 落し物嫌な男にとどけら 質礼も入れた女の落し 鈴つけたま」ガマロを落して来 落し物汗を拭き~取りに来る 美しい声で呼ばれた落し 見付けたは同時揉めてる落し物

9

摩白紫三亜万悦清花清好淡博默 天柳 郎子香司鈍楽子潮村潮郎舟也平

る 遠ざかり

溪子

うちの子に買えな晴着を縫る夜長 嬉しい日障子張り替へた日の夜なべ 宿題へ教える智恵もなく夜なべ 夜なべする母へすまない嘘言き のりばけの夜なべねずるの走る音 時雨れたを夜なべの妻は一人知り 子の寝顔要は夜なべに希望もち 長尻が夜なべの母の気をもませ 夜なべする母の白髪が目にしみる 母親が夜なべをすれば明治めき 辛抱を褒めて夜なべの手をゃめゃ 夜なべふとあんまの笛に手を休め 一年の計を元旦に母夜なべ 翠 光 生凡杜義幽水ゆ水弾紫酔幽同帆一 々九 庵呂的英王客る客正香歩王 夫球 悦万同酔小

夜なべして仕上げますよご如才なし

二三人マッチをすつた落し物駅前で電池を借りる落し物として足がすべった落し物

夫婦して笑つてすんだ落し物

落しものさがすマッチへ風があり 落しもの昨日の所へ来てしまい

けつて見て拾つて届けるまで迷い バスみんな立たせて探す落し物

遠吠へ夜なべの炭をつぎおこし 夜学からもう帰る頃針するな ストに馴れ夜なべに馴れて小市民

残り火も消えて夜なべは未た続き 縫ひ上げた障子しらせる明けそめて 天の河氷る工場の門を出る 酔つばらって帰れは夜なべのせきばらい 終電の音内職の手を休め 夜なべする腹に夜なきの笛がしる 夜業の夫待つて夜なべの毛糸あむ 凩に夜なべの針をちとぬくめ 静かさの夜なべへ鋏の鈴がなり せめてもの餅代と言う夜なべなり 夜なべかと思もたらパチンコして居った 年の瀬を夜なべの妻に支へられ 夜なべもう暮れの暮らしに追っかす 針のメド灯をもう一度下げて更け 夜なべして子の物を買ょ倖に生き 夜なべするミシンへ母が茶を運じ 父ちやんのない子寝かせてから夜など 宿題へ時々夜なべ口をきき 夜鳴きそば聞いて夜なべの手を洗ひ アプレ娘夜なべの母はまちあぐみ 内職の夜なべおもちゃの汽車走る 一服しなはれと夜空へ芋が来る 都詩子生 都詩子 島 一点子 舟 舟風女秋蝶光 則香秋秋

★大万川柳 梅里の店 兼題 発物・二 御投句は大万宛・どなたでも 一とす 計 月廿一日 月十五日 U

歩秋

東 京 アベノ橋地下映画食道街 Z (第廿三回)を募る ば 路郎先生選 句數五句以內 (店内に掲示)

手袋が不気味に落ちてるる夜更り 切を落して恋の山が晴れ 水 光客

十一月十六日 岡山支部句會 山陽旅館 (岡山市)

於 藤本満年

新婚のあなたが云えぬ枕許 夢抱く間なしに長女婿を とり 長女からと云っては居れぬ破目ごなり 這い出した猫が背伸びの枕許 アドルムの量を過した枕許 枕許スイッチの位置たしかめる 給仕とは見えぬオーバで出勤し 思案する顔をオーバの襟が埋め あの頃の苦労を長女懐かしむ **父親へ要と長女がぐるになり** 長女もう愚妻の困ることもきょ まだ惜しい服を長女は譲らされ 身をかまわぬ母へ長女が気を使い 長女もう母へそつぼを向け初め 長女には口に入らぬ菓子もあり 出戻りと云えど長女の幅がきく 子のオーバー少し大きいのを求め 旅帰りオーバー剝ぐょに脱がされる 質草のオーバーを蚊帳を入れ替える 生学引大正時代のオーバを着 わしはまだ三十円のオーバを着 名犬は恋の自由も許されず 隣席の煙草気になる借オーバ 幸福なオーバー二人を包んで居 オーバーに寝卷がのぞく火事見無 オーバ帝た寝卷自炊の火をおこれ オーバーのオの字も云われ娘があわれ オーバーも飲む気か女将に値踏させ 惠二朗 綾たか代 八ツ茶 呆 満佐志 三林坊 十九平 日出夫 介 年 劳 果 坊 年 Ш 笛 仙 風

> 知らぬ街あるけば犬がジロリ見る 玄関の靴を盗られて犬を飼い 待ち呆け犬が匂を嗅いで行き 構曳をぐん (大が 引き離し 不仲とも知らず垣根を猫が抜け 台所隣は 出たがらぬ母合所の隅で老い 不覚にも越えた垣根にこの苦労 垣根越し女同志のよくしやべり 高原の空気両手を挙げて吸い 合所勝気な要に拭き込まれ 合所こんなにきたない下駄があり 台所妻の背丈の棚で吊り 要の座のいかめしくあり合所 違う音をさせ ごん平 ゆたか 百々平 忠美 東岸子 大甲帽 たどみ 大介 满 年瓶

雑川 淀川支部句會 (大阪市)

特価品売場へ咳の子を連れて スト本部の前で夜鳴きは店を出し 咳すれば隣の煙草ちと慌て 除夜の鐘きいて悔なき十二月 十二月十四日 永田六竜子居 武部香林報 都詩子 同花若 村菜林

悪鑵の方が目につくストのピラ

電車スト吾不関とバッカード

詫間支部句會

(香川県)

又未納不足を払う友の便 床の間は花器だけ置いた共稼ぎ 駅ベンチ荷物の方が席を占め 駅までは涙こらえて来た二人 見初めしも駅別れしも駅でした 汽車が来るのに小用がしたくなり 駅弁を買はず子供の土産に 初旅行マイクの声に 頼りきり 円が足りず列車に乗りおくれ 大西迷窓 幸太郎 喜代子 信星子 幹之助 報

安肉を買うのに犬がだしにされ 番犬にわしだ~~と合羽脱ぎ

> 別れます別れますよと答って行き アイシャード別れ話に尚も濃く 貧困の生活読書は止められず 三国志税務署が来て異が覚め 币皮にゆられながらも本を読み 中納言 家里也

雜川 京都支部句會 (京都市

十一月十六日

源

+

床柱家風の艷となつている 劇評は好し観客はついて来ず 無い袖を振れしくと四条の灯 坐るにも立つにもリズム舞の袖 戦争へ妻のうらみの短か袖 制服にお洒落のあつた靴の艶 算盤の艶に問屋と云う構 好評の記事から遠きわが生活 アンコールへこほれる笑顔見せて立ち 要の袖口が貧しいと俺に云う 袖口の紅のぞかせたヘヤーピン 舞台稽古そこで抱える袖が無し マッチ渡す振り口からの手の白さ の艶 へ破 進 0 話洛む 裡報 ちか子 いくを 蘇誠浄 青 あきら 海史弓

雜川

労働会館

十二月十六日

背なの子を声であやして毛糸針 師走らしくあわて正月らしく酔う 俗になりきれば世間が面白く 気分まだ出ぬましにある原稿紙 姐さんの気分を雛妓ズバリ告げ お日柄も決り嬉しい針の先 コ、迄はさからつて来た嵐です 吹き飛ばされる様に小さな駅へ下り **炬燵から妻の風速計つて居** とんがつた気分へ猫が長う寝る よい気分どうせ師走もアト二日 みてい草二 小 晴 青 喜 掬芽二浪由裡

摩天郎

行末は流る」、水と観じたり 行末かワッハッハアと笑ふだけ 後年は吉の八卦がただたより 行末を深く見抜いた父の遺書 行末はあの娘を連れて別れる気

版写謄 田阪

五町田芝区北市阪大

-九九五島 福 話 電 番四——三六五

カットなる癖が立場を意識せず 堺 支 部 向 会 (堺 市

厳格な心立場を利用せず 会計を持つた立場が酔い切れず

良太郎

丘 =3

サラリーで生きる行末知れたこと 行末は僕の妻だと喜ば 玄関に立つて無心の気が変り 悪友が今日は玄関からの用 捨てられる犬自転車にチンミ乗り お茶漬になって芸者は息を入れ 病み勝ちな子の行末をふと案じ 税務署へ行末暗い判を押し 苦労性孫の行末まで案じ 玄関のベルも返事をして呉れず 目転車が呼び止められた儲け口 お茶漬が好きお茶漬で出る生活 八木摩天郎報 生貴笠庵山人 美賀久 圭井堂 とし代 たかし 羅 笛 生

病人があつて気づから今朝の霜 病人は足音だけで医者と知り こたつの番しとりなはれが気に入らず 泊り容あつてこたつのない一夜

がむ要が背なの埃へ起きてくれ

団体で奈良の都をせまくする 団体をさけたコースで行詰り 学歴は学歴今日はてんぶら 斜陽族のままでは死なねっちりなり 梨 郷 里 水

大聖寺支部句會(石川県)

冗談にしてもと教師むきになり ポインターのスピード独身者と知れ ボインター見送りの身にあつけなし 観光のバスに歩けぬ児が残

四苦峯 謇

秋

b

十二月五日 於佐分利明石居 野村味平

せめてもの過去を忘れる花鋏

摩天郎

過去を言うなと社長てれている

十二月二十日

於

摩天郎

居

過去の事云うなと夫無口なり 過去秘めて嫁いでからもバラの道

弾き忘れ思い出す気の眼をっむり 泣落し嘘と知りつく貸してやり 自分にも覚えがあった娘の想い 夢にまで見ると気休め云うてやり 未亡人の餅もついでに搗てやり 公僕と思う税更に腹が立ち 逢えばたゞ思いが云えず拗るだけ 眉体めのつもりのストが長くなり 夢判断父は上手にこじつける £ 木 子 郎

摩天郎

好

RB

文

蝶

小郡支部句會(山口県)

長野井蛙

催促も十二月といふ声で来る 十二月といふ声人を追ひまわし 十二月きれいな義理を果しに来 留守番に御用聞みな断られ 子をおいて行く留守番をたのまれる 子は正月親は手形へ指を折 留守番はラジオー日かけたまま 留守番に判らぬ電話かかつて来 過去帳を繰つて夜長を話し込み

凡九郎客 ゆづる

十二月遂に男の声になり

しり上り老後の酒も亦嬉し

淡貴笠

舟山人

しり上り電話のかかることできり

鹿の子

たかし

検札の車掌バスには物言は 三等車手錠の人と向ひ合 つるはしをやすめてほめる稲の出来 独立の記念日日の丸立てただけ 日の丸の風呂敷代用もう見えず 三代に亘り汽笛を吹いて 重役は重役だけど三等 つるはしの音にとび立つ稲 家出して行けるとこまで買ふ切符 検札に乗越しあわてゝ目をさまし よせ書の日の丸もある七回 平螺蛙秀三生幸虹子

児の指がうろくしてる百貨店 無器用を指の短いせいにする 童心の指きりに野は 黄昏れる

マッチ箱昨日と違ふ生活見る

十一月八日

於

貴生川町役場

黄瀬美秋報

貴生川支部句會

(滋賀県)

雜川 櫻島支部句會 (大阪市)

春

志子子巢人

一月七日 於 日立造船所 真鍋一瓢報

燃え易い公営住宅ばかり建ち

宅難何処吹く風の官舎建ち

馳付けて小火で落んだは物足らず

年玉がもう届いてる大晦 年玉は、やつばり惣れた高になり 年玉へ一枚足りぬポチ 年玉をやるボチ袋買いにやり お年玉袋ほどには入れていず 母からは出すばつかしのお年玉 元旦にしきびを立てに 葬式 がん張つた心算でいたが寝正月 薄幸の子へ年玉の荷が届き こうほりで出てこけて来た子にあるて 乗り物へ終戦型がぬけ切らず パチンコをのぞき年玉からになり 羽子板へ師匠は舞の型でつき **着飾って出ても一号の娘はさかし** 麻雀で取られ三日を寝てしまい 三宝の餅へ初日がもう写り 闘病へ丸く恩師の顔が浮く どこでどを飲んで来たのかも元日 重税をくぶつた金で年始酒 ひさみ 花奈女 花代子 京 定 吞 狸 芳 潮 山 花 花 水 花 船 瓢 村 坊 花 茶 子 美 球潮

日 の 丸 句 (鳥取市)

十二月六日

於

日の丸会社寮

年賀状春の炬燵に引き寄せる 疎遠した人の質状の籤当り 斗争に妻の意見も聞いて出る 新薬に妻内職の夜が続 新薬の名前を母は聞き返 新薬があつても巫女を頼つて居 新薬の効能を読む母となり 新薬を飲ますことからもめにじめ 河村日満子報 法泉子 粗 雪

> **南海電鐵川** 柳 (大阪市)

筒井筒あんたのハーモニカで唄い 兄ちゃんに借られてしるたハーモニカ

日満子

ハーモニカ良いごこちょつびり吹いて見せ

酒があるばかりに会社また休み 私生活女給と見えぬ母の顔 茄子胡瓜育てム嬉し竹の棒 退庁の時 一人旅手拭ぬれたまム続け 間 符 ち合う若夫婦 友淵貴山 摩天郎 声

朽洞偶

デバートでただのお化粧してもらい 多忙の日ただの用事に子がすれる わけてくれとはただで欲しいなり 義理たてに行く水引にコテをあて 棟上げの棟に水引立ち上り ロハでない証拠に受取見せておき ただでやる前口上の長いこと 招待券送つて呉れておごらされ 水引を師匠がかけることはじめ 水引のむすび目妻の指を借り 一月二日 於 不 朽 小松園 潮 郎 里 花 飘柳 里

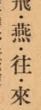
內小兒科

安 岡 Ξ 四 郎

性病科

東へ半丁浜側 道頓堀·日本橋南語

電話南圖三二四六



池澤居楼氏(京都市)より - 異風宛

支部一月句会は 出席▼川雑岡山

せて下さい。 三人は朗らか貰い笑いする

ます。二月号の拙稿は休ませてい ただきます。仰臥乱筆おゆるし下 福田山雨楼氏(横浜市)より 啓遂に喀血絶対安静つづけて居 一路邸宛

年句会は一月廿 ら鳥耕居で開催 廿日午後七時か 午後六時から親 三日午後五時半 南海電鉄川柳句 月廿七日午後五 野支部句会は一 から摩天郎居で 会は一月廿六日 下食堂で開催マ 時半からアベ 開催▼川雑阿倍 人橋近畿直営地 は東京都大田区久ヶ原町一〇九六 手帖」を刊行非売品▼山路開古氏 光男氏(佐賀市)は旧臘に「私の さん結婚記念の幹事が一月十一日 前健保会館階上で開催▼川上雅鼓 十四日後五時半から三菱電機正門 された。行年三十一才。謹悼。 された▼畝村夢晴氏(川雑大聖寺 トンネル十年を記念し、下関駅前 支部同人)が十一月十五日朝永眠 十二月十七日にその除幕式が挙行 に、藤井米三翁の句碑が創建され へ転居された▼鉄道八十年、関門 に初顔合せをしたとのこと▼南川

々人の会柳諷む囲を婦夫生先郎路

飛·燕·往·來

何れも路郎主幹 和寮で開催以上

てに展明二恵

ます。こんなのをどうか続けての の話を通じてまことによくわかり お父様の川柳のよさがお三人さま 川柳雑誌新春号」を頂き

茶々送別会とし

縣本満年、藤本

て十一日に山陽

御両親様へよろしく 都に移して京都でまた住むつもり 私は新春から幸福の門本部を京 一二・二六一

月十六日午後五時から局病院五階

局川柳会(大阪市)の新春句会は一

だつたと▼交通 旅館で開催盛会

十二月十八日深夜カツ血す

医師会文化部杏林川柳句会は一月 二時から三階図書室で開催▼南区 逓信病院川柳会は一月十七日午後

東一クローバー階上で新春句会開 は一月十八日午後一時から県庁前 時から不朽洞で小集続いて新年宴

▼川雑支部幹事が一月三日午後

に勧を尽し午後十時に閉会▼大阪

路郎先生夫妻を迎え柳話を聴く会

七日正午から大原町の恵二朗居で 開催▼川柳諷柳会(岡山県)は一月 学校へ麻生路郎先生夫妻を迎えて

を開いた▼川柳杜人社(仙合市)で

催新人旧人の初顔合せで賑わつた 時三十分から下寺町の光明寺で開 ▼本社新春句会は一月十日午後五

田郡新年川柳大会(岡山県)は一月 最高点者に「カップ」を贈ると▼英 サンルームで開催なお廿八年度の

五日午前十時から大吉村の城山中

みつちりと白髪の増えを云われた 川柳川柳死線を越えて思いいる これで菌がみな出たのなら厄落し

とうれしかつたです。私も本日午 の進出、認識を一層広め深めた事 ら、目を細めてきょました。川柳 声をきょました。火鉢を抱えなが 後から松山中央放送局で新春川柳 談の録音をとりに参ります。 ラジオからおじぎをしたい声を 十二月三十日朝一なつかしいお

柴谷宰二郎氏 -111.110-

てアナウンサー君の隣で坐つて聞 自然なお声を聞きました。逃げ出 いている様なさつかくをする程に して居る松の手振も聞えて来 つぐ ひと言も聞きもらすまじと炭を お早らさんと、兄の肩をたゝい - 路郎宛

三二五大森方に移した。支部句報 になり同時に支部を岡山市内田町 森風来氏が満年氏の後を襲うこと ★川雑岡山支部は一月一日から大 「川雑岡山」も従来通り刊行され

中

兎

庵

平

尾

太

志

海

野

比

呂

史

南区医師会文化部 杏林

木 中 長 黒 车 河 南 田 安 村 島 谷 岡 村 中 田 木 無 生 Ш 珊 瑞 捨 弾 名 枝 迷 K 林 庵 舟 耕 Л 郎 路 哲 正

(神戸市)より (三句)

社 0

る。

寒 中

御 見

心から感謝している。有難ら★私 方面から沢山賀状をいただいた。 ことが出来たのである★今年は各

陽新聞社祭に転住されることとな

氏で、各自持ちよりの短冊の句に

栗、春巣、文蝶、古方の諸

川

柳

家各位

水

谷

鮎

殊に「三 に新鮮味 と、内容 以上に早 された。 ことが、 があつた れたこと く刊行さ だ。予想 を喚ん 人は朗ら 特に歓迎 しい反響 ☆新春号 らエライ反響があつて驚いてい 年は度々旅に出られるような気が 見せてやるので出かけたのだが、 している★暮の三十日に放送した な五日間が夢のように過ぎた。今 酸を試み八日に帰阪した。ゆかい 朗居に招かれ、雪見酒の明治色を 出た。そして七日は大原町の恵二 なり、五日は雪の降る中を句会に 田郡の新年川柳大会を催すことに の恵二朗君の肝煮で城山中学で英 それを機会に二楽荘主人や大原町 に出た。大吉村の二楽荘を葭乃に い、午後から大原柳人のため柳

史」は休散の止むなきに至った。 安静中なので、 田山雨楼氏が十二月十八日に喀血 川柳研究記事では阿達義雄氏の 山根白星五氏の「作品検討」、古 根民郎、吉田水車、大森風来子、 柳のデッサン」、東野大八、石曾 学」の続稿、東野大八氏の「詩川 としては福田山雨楼氏の「川柳大 けたいと思つている★本号の読物 も特に飛躍したところをお目にか 年になるので、本年は編輯の上に で私が川柳に手を築めてから五十 か」の鼎談はらけた★本年の五月 「初鰹代と江戸通貨」がある★福 「川柳今月の歴 ない。

は一月四日から葭乃と美作への旅 ても原稿放送と云うものには味が かつたのである。いくら巧くやつ 自由に喋べらせてもらつたのがよ た。反響は大きいほどゆかいだ。 二郎画伯まで感激の通信を呉れ る。未知の人や至つて鑵不精な宰 成につとめていられる▼水谷鮎美 日々新聞の柳壇を担当、柳人の育 た▼三鴨美笑氏(米子市)は山陰 谷一七(元前田候別荘)へ移され 門本部を京都市東山区山科日岡夷 帰えられた▼池沢楽居氏は幸福の 川県三豊郡観音寺町中新の自宅へ 流氏(下関市)は侃流洞と改号さ NHKの朝の訪問の放送をされた 帰える不水」の年質電報が届 り、三月末ホノル、寄港四月なか れた▼中山中納言氏は一月から香 が各地から反響があった▼石川侃 の十二月三十日八時四十五分から たマ路郎先生は頗ぶる元気で歳末 ます、今アマゾン鰐の南米にあ つた▼蛭子省二氏(愛媛県)は一 信を寄せられた▼楼川不水氏から 月一日に宿痾の発作になやまれ、 「洋上遙に新年のお欣びを申上げ 喘息苦壁に面して梅の影」の句 (尼崎市)は一月十一日の川雑

京 月 ▼藤本満年氏(岡山市)は一月十五 ためにクラブ関西で柳話をされた から、二六会主催の話を聴く会の 郎先生は十二月廿六日午後五時半 のため十八日に東上されると、路 横浜出帆渡米されるので、見送り 不 東京都目黑区平町廿五番地山 山陽新聞東京支社長として上 办 朽 洞 日には令息仁 一郎博士が、 忙、一月十九 公私ともに多 ▼戸倉普天氏 (兵庫県)は 夢裡、 と云うだけに生々庵理事長夫妻と 任理事の忘年会が十二月二十九日 々庵居で開催された。明日が晦日 夜、路郎先生夫妻をお招きして生 下津井へ向はれたと▼不朽洞会常 見送り、その足で令間の居られる される路郎先生夫妻を姫路駅まで 朗氏(岡山県)は大原町から帰阪 として活動されている▼本田恵二 を含む三ヶ村合併町制施行の委員 出席された▼政田大介氏(岡山県 岡山支部の満年、茶々送別句会に は軽部と隣接の笹村、鳥取上両村

臥床していて毎月「川柳大学」を

い、新年号に掲載する筈の原稿を 締切ギリ~に執筆する労苦を思

一ヶ月遅らしたので、期せずして

二月号に「川柳大学」を掲載する

因んだ福引があり、いとも和やか に飲んで唄つて忘年気分を満喫。

新 会 員 介

H 臼井 置 井 野 交 吞 格 風(岡山県) 笑 (鳥取県) 正 (岡山県) 以上满年氏 美笑氏推薦 IF. Æ 作應

Œ

保邦友は久保和友の誤り 十二月号一八頁二段二七行目久

明 御

御余徳とふかく柳魂に透徹 菊と棒の花にかこまれて大往 たしましたる次第に御座 とえに御諸彦さまの詩情 生を成されましたることはひ す。八十年の生涯をしづかに 慮をいたべき御厚礼申上げま 母永眠に際しましては御配 いま 0

昭和二十八年一月十八日 尼崎市西字日開一ハー

in Japan

五二八円 二六四円

Printed 発行所 昭和廿八年 二 月 大阪市任吉局無内形代西五丁日二五歌培 和廿八年 一ケケ年年 月廿五日印刷

一日発行

太阪市住言局區內方代兩五丁自二五零地 **打成** 麻 生 幸 二 柳雜誌社 無難口座 大阪 七五〇五〇 RE.

礼

儀ながら誌上にて御海容下さ 消光いたし居ります。早速拝 いませっ 趨御礼申上げる筈のところ略 いたしまして遺族一同無事に 本日七七 満中陰相営み忌明

募

集

課 題吟募集

위. ピクニック 朝 招 母 寢 車(十句) 十句し (十句) 友 高 麻生梨里選 武部若葉選 彩 三月二十日歸切 淵貴山選 (二月廿日韓切) Wi. 一鈍選

毎號募

文章(評論·研究·感想其他) 近作柳樽(雜畝廿句 柳塔(雜 詠) 麻生路郎 、麻生路郎選 (世月廿日締切)

規

・『近作柳樽』は一般作家の雑吟 所氏名雅号を明記する事。 住

・『課題吟』は何人でも投句が出 来る。 を募る。

への投句は不朽洞会

▼『川柳塔』 員に限る。

B列5号 雑誌 定 毎月一 価 送料(四円 回一日発行 四〇円 号卷

THE SENRYU ZASSHI

NO . 3 0 9

Published monthly by Senryn Zasshisha, Osaka, Japan.



